
K-ON <Backroom Story>

グラッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K - O N > B a c k r o o m S t o r y <

【Nコード】

N 7 6 0 9 Z

【作者名】

グラッド

【あらすじ】

少子高齢化とか何とかのせいで今年から共学になった桜が丘高等学校に入学した^{むらそのゆうすけ}邑園結祐。

彼にはちょっとした問題があり……。

そんな結祐が軽音部のメンバーや、先輩、友達と紡いでいくお話です。

不定期更新、若干キャラ崩壊してるかも、漢字間違いたまにある

かもですが興味が少しでも湧いたら読んでみてください>m
(

第一話 ? PROLOGUE ? (前書き)

初投稿です。

感想をいただけるとうれしいです。

第一話 ? PROLOGUE ?

いつからだろう？

こんな体質になったのは。

これのせいで俺は中学時代毎日が修羅場だった。
治そうとも試みたけどうまく治りきらなかった。
だから、俺はもう決めたんだ。

そう、俺はもう女子なんぞには関わらない！！！！

桜が咲き誇り、誰もが様々な思いを掲げて新しくスタートを切る
4月。

『彼女を作る』『部活に打ち込む』『受験』『まあ、頑張る』な
どなど、様々な目標をもち心地よい風に吹かれている新入生の中、
今日から晴れて桜が丘高校に入学した俺、むらその邑園 ゆうすけ結祐はクラスの面
々を見て絶望していた。

「な、何でこんなに女子率が高いんだ？」

思わず口に出してしまった。

だがまあ仕方ないはずだ。

だって、クラス35人中30人が女子なんだし。

ただここで俺が普通の男子と違うのは、喜ぶべきこの状況に絶望
しているところだ。

では、なぜ絶望しているかというと、俺はメチャクチャ女子が苦
手なのだ。

どの位かと言うと、目が合うだけで脳内がフリーズして頭から煙

を出しちゃうくらいニガテだ。

つーわけで、ガッツリBlueになっていると、クラス内で数少ない希少種であるはずの男子から、

「何でって、ここ去年まで女子校だったからじゃない？」

と、まさかの返答が返ってきた。

若干驚いたけど、その声は非常に聞き慣れた

声であり、そして同時に俺をこの状況にしゃがったヤツだと確信したので、俺はにこやかスマイル+額に青筋でその声の主を見(睨んだ)た。

「デメエ知ってて俺をここに入れたのか・・・勇利」

「まあね。だって、女子率90%以上だよ？行くっきゃ無いっしょ？」

「よく堂々と不純な入学動機叫べんな・・・って、勇利のそんなことは今に始まったことじゃねえからどうでもいいんだ？勇利、お前俺がメチャクチャ女子苦手なもの、高校ではあまり女子と関わりたくないって願望も知ってたんだろ？」

「だからここに誘ったんじゃない！ここなら結祐の女子がニガテなのも半強制的に治るじゃんww」

「志望校をお前に相談したのが間違いだった。そして笑うな」

「まあまあ、でも考えてみなよ、3年間女子と戯れ放題だよ？バレンタインなんか学年女子全員から告られたりしてさ、『ごめん皆、僕はみんなに対等に愛を与えることが使命なんだ。だから誰か一人なんて選べないよ』とか言っちゃったりしてさ、そしたらさ・・・グフ・・・くふふふふふ・・・」

この妄想族がと呟きながら勇利の顔をみたが、その顔は気味悪く歪み、すでに俺の悪友篠原勇利しのはら ゆうりの顔ではなく不純な考えを膨らませ

た変人、いや、もはや不純物だ。

こいつ絶対彼女できねえだろーな。

・・・俺もだった。

なんせ声かけただけでもショートしちま・・・

「あの・・・」

ボンツ？（ショート音）

「ええ？だ、大丈夫ですか？」

「あー、こりやもうダメだ」

「ダメなんですか？」

「あ、えーと、こつちの話だよ。それよりも、確か君は平沢憂ちゃんだっけ？」

「あ、そうです！私平沢 憂ひらさわ ういです・・・って、まだ自己紹介もしてないのになんで名前知ってるんですか？」

「当たり前だよ！これから一緒に過ごす仲間（の可愛い女の子）の名前と顔くらい名簿と出席番号で確認しておくさ。あと、遠慮して敬語なんてつかわなくていいよ」

「そっか。でも偉いんだね。きちんと最初に名前を確認しとくなんて」

「いやいや、そんなの（僕の輝かしい未来のために）あたりまえだよー！」

「ふ、不純な動機が見え隠れしてんのは気のせいか・・・？」

「おお！結祐！いつの間に復活した！？」

情けないが今です・・・なんて恥ずかしくて言えねー。

っつか、どうにかならんかな？この体質っつか性格。

話しかけられてショートは情け・・・

「よかつた〜！さつきはゴメンね〜！」

・・・あ、謝らなくていいから、話しかけない
ボンッ
！！

「ええ！？また！？」

「頑張ったな結祐。3秒耐えたぞ」

「ご、ゴメン。私さつきからなにが・・・」

「ああ、憂ちゃん気にしないでいいよ。これはこいつの体質みたいなもんだから。・・・とつ、とにかく、俺は篠原勇利。んでコイツは邑園結祐。僕たちは中学生の時から友達なんだけど、実は結祐は極度の女恐怖症っつーか、超恥ずかしがり屋？それとも体質なのか？ま、まあとにかく女子に話しかけられたり、目が合っちゃったりするとこんな感じに頭から煙を吹いてショートしちゃうんだ」
「そ、そうなんだ・・・じゃあ、何でこの高校にしたの？ここ去年まで女子高だったんだよ？」

「それはまあ、僕が誘ったんだけどさ。女子が多い環境にいれば治るかな〜的な感じで。・・・でさっ！！」

「な、なに？」

「憂ちゃんさ、コイツのこの性格みたいなのを治すのに協力してくれないかな？僕ここにいてるけど実はこのクラスじゃないからさあ〜。お願いっ！！」

「（ええ！？？クラス違うんだ！）う、うん。いいよ。席も隣だし」

「それじゃあ、憂ちゃん！後は頼んだ！！」

「え、ちょ、ちよつと・・・」

そつだ勇利！ちよつと、ちよつと待てえ！！

と、言いたいのになショートしてて身体が動かない！！

くそお、勇利め、何で男子じゃなくて女子に頼むんだ！？

「あの」

「だあ！！それ以上なんも言わないで！！と、とにかく勇利が変なこと言つてゴメン！それと、改めて俺は邑園結祐。よろしくな平沢」

「憂でいいよ。こちらこそよろしくね結祐くん」

「下の名前で呼ばれた・・・」

「ん？何か言つた？」

「なにも言つて ボンツ！！」

「ええ！？ご、ゴメン結祐くん。私今度はなにがまずかつたの！？」

こうして、女子が得意じゃない俺の、元女子高での『甘くなくてほろ苦い』・・・要は苦いだけの青春がスタートしてしまった。

第二話 ？部活見学！！？？（前書き）

戸惑いながら書いてます。

至らない点あつたらお知らせください。

また、感想をいただけるとそれを励みにして頑張ります！！

第二話　？部活見学！！？？

俺、邑園結祐（15歳）は女子がニガテという非常に残念な男子（by篠原勇利）らしい。

しつかあゝし！

俺は進化した！！

「結祐くん部活決めた？」

「ただだけど、憂は？」

「私もまだなんだ。だから、今日の放課後部活見学に行かない？」

「見学かあ、俺も部活はやるのかなあと思ってたから一応大体の部活は行っただけ……。先輩が全員女子だから部員が多すぎる部活は厳しいし。運動部じゃ試合に出れないしさ……」

「そつかあ……。あ！じゃあさ、お姉ちゃんのいる軽音部に行かない？」

「軽音部って着ぐるみでチラシ配ってたやつ？つか姉がいるんだ」

「うん。ニワトリとかの着ぐるみで頑張ってた部だよ。あ、でも心配ないよ。お姉ちゃんもふわふわぽかぽかしててすごく可愛いからきつとおもしろいよ！」

「軽音部じゃなくて憂の姉ちゃんか？」

「うんっ！……も、もちろん軽音部のほかの先輩もいい人だし、おもしろいよ！」

「ふゝん。じゃあ行ってみるか」

「うん！じゃあ私、他の友達も誘ってくるね」

「おお、りょかい」

そう言っただけ俺は歩いて行く憂を見届けた。

この会話と見送り、合わせて約5分。
入学して1週間。

憂のおかげで、俺は眼さえ合わなければ5分は喋れるようになった。

ただし、喋り終わると

ボフン！！

「・・・せんせー。 邑園くんが頭からけむり出してまーす」

しょ、ショートします。

??????

と、いう訳で放課後。

俺は憂とその友達の鈴木^{すすき} 純^{じゅん}と一緒に軽音部が活動している音楽室へ向かっていた。

・・・一緒というには少し離れて歩いているけど。
だって・・・

「結祐はなんでそんなに離れて歩いてんの？ 憂で耐性ついたんじゃないの？」

「それは憂^{うれ}限定なんだよ！そして下の名前で呼ぶな！俺を見るな！！」

「えゝ、いいじゃん結祐ゝ。私のことも純でいいからさあwww」

そういいながら近づいてくる純。

後ろで憂が「じゅ、純ちゃんそのへんにしておかないと・・・」
といってるがお構いなしだ。

俺だつてそれを黙つて見ているわけじゃない。
即座に後ずさりを開始!!

したかったが、既に『会話をする』『下の名前で呼ばれる』『目
があつてしまった』の3つの攻撃により、HPが残り少ない俺はけ
むりさえ出ていないものの、身体の主導権がもう無かった。

ど、どうすれば・・・！と、そうこうしているうちに、ついに

それだけならなんとか耐えられるものの、目を逸らして下を向く俺を覗き込んできたんだからもうアウトだ。

くっ！耐えるんだ邑園結祐。

お前は進化しただろ！

[illegible]

そう呪文のように脳内で反復している俺などお構いなしだと言わんばかりに純は再度俺の目をジッと見つめた。

が、脳内反復していて反応のない俺に飽きたのか

「なんだあ。大丈夫じゃん。つままないな。」

と、ついに覗き込むのをやめた。

丁度その瞬間。

俺の身体に異変が起きた。

一方、俺の反応の薄さに飽きた純は大きなあくびをしつつ憂を見ただが、

「じゅ、純ちゃん・・・!!」
「え?どうしたの憂?」

その憂の青ざめた顔と、指差す手の震えに異変を感じ急いで再度振り返った。

また、純が再度振り返るまでの短い間に、ショートするのを我慢した俺は(恥ずかしさやらなんやらの)消化不良が起きて、

・・・ぽたつ。

「『ぽたつ』?何の音?」

「・・・ぐつはあつつ!!」

口から血を盛大に吐き出した。

「吐血う!?あ、『ぽたつ』って血のたれた音か」

「純ちゃん納得してる場合じゃ・・・」

「へえ、やっぱり結祐はおもしろいね。まさか、ショートで済まないくらいの攻撃加えると吐血するなんてww」

「あ、悪魔だ。純は癖毛の悪魔だ・・・うつ!」

「ちやつかり名前で読んでんじゃん」

「お前が呼べって言ったんだ・・・ぐふっ!」

「意外と純粹か!?っていうかあんま無理しないほうがいいよ」

「それ純ちゃんが言えることじゃないと思うよ・・・。結祐くん、保健室行く?」

「だ、大丈夫。それより音楽室行こうよ」

「そうだね。そうだ、結祐歩くの手伝ってあげるよww」

ぱしっ
(純が俺の手をつかんだ音)

•

「あれ？反応なし？」

「純ちゃんそろそろやめてあげようよ……」

「いや、これでやめるつもりだったんだけど……。ついに覚醒したの」

「あが・・・」

「あが？」

[illegible]

「？・憂ひぬこしうど」……

「と、とりあえず離れて見てれば……」

「はっ!!」

「結祐（くん）！！」

「お、お花畑と手招きしている少年が見えた！」

「ごめん。あたしが悪かった」

謝るなら最初からやめてくれ。

もう手遅れなんだよ……グスッ。

「本当に大丈夫？結祐くん」

「ああ。ただ、こっから音楽室まで少し離れて歩いてくれたりすると助かる」

「合点了解ですー！」

「純は視界から消えるくらい遠くを歩いてくれると俺は喜ぶぞ」

「う・・・それはひどい」

「嘘だよ。ほら行こうぜ。憂、純」

「うん。そうだね。行こうか純ちゃん」

「うん！軽音部ってカッコヨさそうだな」

・・・俺への罪悪感はまだ消えたんかい。

と、うんざりしつつ俺は憂と純が歩き若干距離が開くと再び歩き出した。

・・・ほんとにこんなんでもこの学校で3年間生きていけるのかな、俺・・・。

??????

ついに音楽室についてしまった。

ま、正確には音楽準備室だけど、軽音部の活動拠点ねじろなのには変わらないな。

正直なところ、俺はここ数日の部活見学でいい事は一つも無かった。

というか、割と最初の段階で精神が冥界にトリップしてしまったので記憶がない。

なので部活の雰囲気なんかは俺を散々振り回してくれた勇利に聞いたんだけど、『結祐ってば終始ニコニコして一言もしゃべらないもんだからよっぽど感動したんだねwww』となぜか見学内容では

なくこんなふざけたこと言いやがった。

その時は『つつか、そもそも質問の答えになってねえよ』とツツコミを入れることすら忘れてたなあ……。

もちろんそのあと勇利はキチンと成敗したけど、結局話は聞けずじまい。

覚えているのは意識が戻るたびに再び冥界に引き込まれるという無限ループのみだけで……。思い出したら気持ち悪く……。うええ。

ということではぶっちゃけ軽音部に行くのも嫌だし、部活に入るつもりも全くない……！

でもまあ憂の好意を無駄にするわけにはいかない！とここまで来たけども、

「結祐くんドア開けるけど大丈夫？」

「だ、ただただ大丈夫」

「結祐。深呼吸、深呼吸」

「すーはー。すーはー……」

「それじゃあ開けるね」

憂はそう言っただけ扉を押す手に力を入れる。

親父、お袋、結祐はこの軽音部から必ず生還して見せます……！

「……失礼しまーす」

「あ、憂！」

「憂ちゃんじゃん」

「いらっしゃーい」

中には3人の先輩がいた。

一人は憂に瓜二つだが髪の毛を肩のあたりで切りそろえているところとそのいかにも天然っぽいオーラだけは憂とは違った。

しかし髪の色といい、顔立ちといい、異常なほど似ているなあ。

恐らくこの人が憂のお姉さんなんだろう。

もう一人はソファで寝っ転がっていた。

特徴を述べるならば、おでこ。

カチューシャで前髪をあげているからおでこが見えるのは当たり前なのだが、なんだかそれ以上に何かを訴えかけてくるおでこだった。

あとは、なんかはきはきしていそうなオーラがにじみ出ている気がした。

それにしても、ソファで寝っ転がってる先輩からはきはきしてそんなオーラが出るとは。

もう一人はティーカップを持っているおとなしそうな先輩だった。

ただ、特徴は山ほどあった。

まずは綺麗な金髪の髪。

天然パなのかパーマかけてるのかは不明だけど、フワフワした長い髪はどこかの王族を思わせるようだった。

次に雰囲気。

とても一つ上の先輩とは思えない寛大な雰囲気というか、とにかく大人の女性を思わせるような雰囲気だった。

そして極め付けには……まゆげ。

俺自身極め付けにまゆげを持つてくことに違和感MAXだけど、このたくあんのような太く整ったまゆげを無視できるものはいないだろう。

幸い3人とも憂のほうを見ていたので先輩たちをちゃんと見るこ

とができたが………親父、お袋、俺は短い人生だった
が悔いは無いよ。もしもこの軽音部から生還できなくとも……？

と冗談はほどほどにしておいて。

さて、先ほどリポートしたとおり、中にいた先輩方は全員可愛かった。

うん。それは認めよう。

でも何故にメイド服！？

「お姉ちゃん、部活見学なんだけど……」

「うん入って入って」

俺の心のモヤモヤを無視って奥の机へと通す平沢姉。

……心の声を無視るって当たり前か。

そう自分で自分にツツコンだ瞬間。

「逃がさないわよぉー！！！」

「いやあああああああああ！！！！！！」

という声とともに何かが通り過ぎた。

人……だよね？

「あはは。さわちゃんあのクリスマス会以来、自作の服着せるのが趣味になっちゃって」

「そ、そうなんだ」

憂、顔が引きつってるぞ。

つつか、ココ軽音部で合ってますよね？心配になってきたよ俺。

そんな俺の気持ちとは裏腹に笑顔で席に俺たちを着かせる平沢姉。ちなみに俺のHPはここまで奇跡的にノーダメージだ。

「ムギちゃん。これを運べばいいんだよね」

「そうよ。熱いから気をつけてね」

どうやらお茶をくれるらしい。

本当にここ軽音部・・・？

そう思ったため息を軽くつきつつ平沢姉をちらっと見ると。

カタカタカタカタカタカタ・・・

ティーカップが踊っていた。

とんだ不器用さんだな平沢姉。

と、その時

「あ！」

ついに平沢姉の手からティーカップが飛び立った。

「まじかよー！」

そう言いながら俺はなんとかカップを受け止めた。

幸いいい感じに垂直に落ちてきたので中がこぼれることもなかった。

「せ、セーフ」

「おお！ありがとね」

そういつつ軽くお辞儀をする平沢姉。

まったく、気をつけてくださいよ！そう言ってやろうと思ったその瞬間、

「お姉ちゃんお盆斜めにしちゃダメ？」

「え？」

その気の抜けた返事の直後、ガシャン？という音と共に俺の頭の上にティーカップが逆立ちした。

まあ、要は頭の上に盛大に紅茶がこぼれた。

しかもいれたてのアツアツのやつが。

「あっちいいいいいいっ？」

と言った時には既に俺は水道に向かっていた。

幸い、水道は音楽準備室内にあったので即座に消火活動を開始？

しゅうううううう……

俺の脳内データベースに問い合わせしてみたが、どうやらショート以外で頭からけむりを出すのは始めてらしい。

この場合は頭は頭でも頭皮からだけだな。

と自分で自分に勝手に訂正をいれたその時、すっとタオルを渡された。

顔を見ていないから確証は無いけど多分平沢姉だろう。

とりあえず頭も冷やされたのでタオルを受け取り頭を適当に拭いた。

「……なんだろう？この気まずい感じ。
もしかして、みんな俺の顔色窺ってる……？
とにかく何か言わなくては！！」

「え、え〜と……。だ、大丈夫！俺、頭からけむり出すの慣れますから！！」

しーん……。。

し、しらけた！！

一体どうすりゃあいいんだ！？

一応場を和ませるための渾身のギャグだぞ！！
頼む！誰か笑ってくれ！！

「……大丈夫？」

「はい。大丈夫です……。グスッ」

一度もショートしたわけじゃないのに、俺の心はズタズタになった。

第二話 ？部活見学！！？？（後書き）

次回は・・・

『じゃあ、改めて部員紹介といくかぁー！！』

『え・・・。そ、それはちょっと・・・』

『そう言われるとなおさらやりたくなるのが人の性ですよ』

『先輩まさか・・・男！？』

次回、【部活見学？】

乞うご期待！！・・・と言って、期待してくれるとうれしいです！！

第三話 ？部活見学！！？？（前書き）

第3話。

どうぞー！

第三話 ？部活見学！！？？

「じゃあ、改めて部員紹介といくかぁー！！」

おでこが印象的な先輩のその一言でやっと本格的に部活見学になった。

できればもうちょっと早くそうして欲しかったけど。
頭と心がひりひりする・・・。

「それじゃあ、まずは」

「はいっ！！りっちゃん隊長！」

「む、何だね？唯隊員！」

「まずは、１年生に自己紹介して欲しいです！！」

「それは確かに、それじゃあ名前を教えてください！！」

そう言っておでこの印象的な先輩（以下おでこ先輩）が純を指差した。

あまりのハイテンションに純は若干たじろいでいた。

俺が最初だったら絶対答える前にショートだな。

「えっと、鈴木純です」

「鈴木さんな。それじゃあ次！隣の男子！！・・・って男！？」

「今年から共学になったんでいても不思議ではないと思いますけど」

「なにい！！今年から共学だったのか！？」

「私も知りませんでした。りっちゃん隊長！！」

「わたしもです。りっちゃん隊長」

おでこ先輩に平沢姉& a m p・金髪の先輩が乗ってきた？
自然にこれが成り立つとは・・・軽音部、恐るべきギャグ線。

一応この辺で補足しておくが、俺は未だに目線を適当なところに逸らしているからなんとかノーダメージだ。

「ところで、共学っていう驚愕の事実も判明したところで、自己紹介続けていいですか？」

「ああ、いいけど。今のって狙ったのか？」

「狙う？何を？すか？」

「むむ、自然にダジャレが出るとは恐るべき新入生！！」

「・・・始めていいすか？」

「ああ。悪い悪い。いいよ」

「えゝ、邑園結祐です」

「邑園君な。それにしても、何でさっきから目を合わせないようにしてるんだ？」

ギクツ？

ば、バレてた？

くっ、このままでは危険だ。

その一心で俺は憂に助けを求めるべくアイコンタクトを図ろうとした。

のだが、そこで気がついてしまった。

アイコンタクトなんてしたら、俺ショートじゃね？

完全に退路は途絶えてしまった。

「……ええい？ままよ？
もうなるようになれだ？」

「べ、別に逸らしてなんかないっすよ」

「ふーん。じゃあ私の目をしっかり見てみてよ」

「え……。そ、それはちよつと……」

「なるようにできねえええ？」

「やっぱシヨートは辛えよ？」

と、俺の心が涙でいっぱいになりかけたその時だった。

「あ、あの？」

「憂いいいいっ？」

「ナイスタイミング？」

「やっぱ持つべきものは最高の友達だね。」

「結祐くんは目が合ったり触れられたりすると、なんて言うかおも
しろいことになっちゃうからあんまりやめた方が……」

「……おもしろいこと？」「……」

「憂、俺が送った褒め言葉を返せっ？」

「余計食いついちゃったじゃんか？」

「ふーん。おもしろいことか？」

「ちよ、のぞきこまないで！ホントにやばいですから……！」

「そう言われるとなおさらやりたくなるのが人の性ですよ」

そう言つて俺を覗き込んだおでこ先輩。
必然的に目があつてしまう。

嫌だ！ショートは、冥界旅行は嫌だアアア！！

と、思つたのだが、

「アレ？目があつてんのに・・・？」

「なんだ大丈夫じゃん。憂ちゃんも大げさだなあ」

俺はショートしなかつた。

何で？どうして？Why！？

全く意味不明だつた。

何でショートしねえんだ！？

考えられるとすれば・・・

「先輩まさか・・・男！？」

「んなわけあるかぁッ！！」

「ですよ。じゃあどうして・・・」

「結祐くん、もしかして治つたんじゃない？」

「治つたのかな・・・？」

そう俺が首をかしげると、おでこ先輩が急に俺の顔をガツチリつかんだ。

一瞬この場にいる１年生が全員ヤバいと思つたがまたもや平気だつた。

何でだ？

謎が深まってしまったので再び首をかしげようとしたのだが、そのとき急におでこ先輩の手に力が入った。

「状況が読めないけど、そんなに目が合うとヤバいことが起こるはずなのであれば唯を見ていればいいだろー!!」

「・・・・・・は？」

いやいや、読めないのはあなたの脳内ですよ。

と、ツッコミを入れている間におでこ先輩により無抵抗な俺は無理やり平沢姉の方に顔を向けられてしまった。

そして、不覚にも目があってしまった。

「なんだ、やっぱり平気じゃないか」

そうおでこ先輩が言いきった瞬間。

ボンッ！！！！

俺の精神は冥界旅行へ出かけてしまった。

??????

「おい。大丈夫かー？」

「うおわっ！！」

目が覚めると目の前におでこ先輩がいた。
でも、またまたショートしなかった。

どうやらこの先輩のみ大丈夫らしい。

「いや、いきなり頭からけむりだして机に突っ伏しちゃうもんだからビックリしたっつーの」

「す、すいません。体質っつーか、どうにも出来ないモンなんで」
「らしいな」。憂ちゃんから聞いたよ」

「そう言えば、憂と純は？」

「もうとつくに帰ったよ。惜しくも二人とも確保できなかったけどな」

「そうすか」

そう言いながら俺は窓の外を見てみた。

確かに西日が差しこんでるし、きれいな夕焼け見えちゃってんな。つたく、どんだけ気失ってたんだ……。なっさけねー。

「んじゃあ、俺もそろそろ……」

「……ちよつと待ったー……！！」「」

「ええ！？憂たち帰っちゃったし、俺見ての通りショートしちゃうから部活に入るのなんて無理っすよ！！」

「そんなのは百も承知だぜ！！だから私しか喋って無いんだろ？」

「た、確かに……」

「こつちはこつちなりにショートさせないようにしてるんだから、自己紹介と演奏聞くらいいいだろ？」

「……あんまりここにとどまる理由として成立してないよな。」

でも長く居座っちゃったし、それぐらいは聞いて行くのが礼儀か。よしっ！今度は絶対ショートしねえぞ！！

「わかりました。俺も流石にこのまま立ち去るのは気が引けるんで」
「よぉーし！ー！それじゃあ、自己紹介いつとくかぁー！ー！ー！」
「「おーっ！」」

「まずは、我らが軽音部の源！お茶とお菓子の提供者であり、キーボード担当のお嬢様！ー！琴吹紬！ー！」
「どうも、琴吹紬です」

ぐっ！ー！

耐えろ、耐えるんだ俺。

大丈夫。俺が見ているのは目じゃない、あの整ったまゆげだ！ー！

「続いてー！ー！軽音部の華。ファンクラブまで存在する華麗なるベ
ーシスト！ー！秋山澪！ー！」

「ファンクラブの事は言うな！ー！ー！ー！つと、秋山澪です。よろ
しくな」

「よろしくです」

・・・秋山先輩。

目を逸らしてくれてありがと！ー！ー！っ！ー！

にしても綺麗な先輩だな。

長い黒髪も、しっかり者そうな顔立ちも、全部のパーツが共鳴し
合っているような感じがする。

ファンクラブがあるのも納得だな。

「さて次は、我らが軽音部のギター担当にしてメインヴォーカル！
そして憂ちゃんの姉でもある、平沢唯！ー！」

「どうも、平沢唯です。憂から話しは聞いてるよー。憂と仲良くし

てくれてありがとね」

「い、いえいえこちらこそ……」

容赦ねえええ!!

悪気は無いんだろうが、そこまで真っ直ぐ見られると悪意しか感じねーよ!!

うう……。

意識が飛びそう……。

「ほら、唯それくらいにしとけ。それ以上やったら邑園君また気絶しちゃうだろ」

「はっ!! 忘れてた!! 結祐くんごめんね。そしてありがとね澪ちゃん」

「それじゃあ、意識が朦朧としてきたところで私の自己紹介いくぜ!!」

「ど、どう……ぞ」

「私は、頭脳端麗・容姿明快! 軽音部の創設者でもある……」

ー田井中りっつー!!」

「あの……」

「ん? 何だね邑園君」

「『頭脳端麗・容姿明快』って頭脳明快・容姿端麗の間違いでは?」

「こ、細かい事は気にするな!! それじゃあ、自己紹介も終わったところで演奏いってみるか……!!」

田井中先輩のその一声で全員が持ち場につく。

……案外カッコいいな。

「それじゃ、いくぞ! 1 / 2 / 3 / 4!!」

?????

演奏はそこまで凄いわけでは無かった。

音楽知識がほぼ0の俺が聞いてもお世辞にもうまいと言えるもので無かった。

なのに俺は物凄く感動していた。

みるみる音楽に引き込まれていった。

聞いている間は目があったりしたけど、ショートすることすら忘れてた。

演奏が終わったその瞬間。

俺は惜しめない拍手を送っていた。

その行為は意識的にやったというよりか、反射に近かった気がした。

「拍手してくれてるってことは、それなりに良かったってことか？」

「いいえ！あんまりうまくありませんでした！！」

「「「え？」「」「」

場が凍りついたのがわかった。

でも夢中になっていて、気の利いた言葉が浮かんでこなかった。

だから、俺は今自分が感じたことと、自分の思いを素直に伝えることにした。

「でも……」

「でも？」

「引き込まれました。何度も何度も平沢先輩や秋山先輩とも目があ

ったけど、ショートすることを忘れていました。それくらい引き込まれました!!」

その言葉を聞いて一気に先輩方の表情が明るくなった。

が、俺の話はまだ終わっていない。

この次の言葉が一番いいくらいけど言いたかった。

「それで、さっきまで入部しないって言い張ってたのに急に心変わりしたみたいで不愉快になっちゃうかもしれないんですけど・・・俺を、この部に入部させてください!!」

若干、沈黙が続いた。

そのあいだ俺の心拍数はどんどん上がった。
もしかしたら駄目かな?とも思った。

けど、帰ってきた言葉はいたってシンプルだった。

「「「「軽音部へようこそ!!」」」」

第三話 ？部活見学！！？？（後書き）

次回は・・・

『くっ！やっぱり判断ミスだったのか！？』

『お、俺一人・・・！？』

次回、【新歓ライブ！！】

・・・多分一話で収まるはずっ！！

第四話 ？新歓ライブ！！-前編-？（前書き）

一話で収まりませんでした（；；）

近いうちに後編も投稿できる様に頑張ります！！

感想をくれるとうれしいです！！

それでは4話どうぞ（＾Ｏ＾）／

第四話　？新歓ライブ！！-前編-

入学してから8日。

俺、邑園結祐が軽音部に入部した次の日。

未だ多くの新入生が部活を決めている最中の今日は、実は軽音部の命運を懸けた日だったりする。

そう、今日は……

「新歓ライブだぁー！！！！」

「「おおー！！！！」」

「ユウ、漣、声が出てないぞ！ほらっ、二人合わせてせーの！」

「「おお、おお……！！！！」」

「よし！それじゃあまずは

「お茶にしましょうか」

「「さんせーいっ！！！！」」

そう言って田井中先輩やひらさ……ま、秋山先輩以外はお茶用（？）テーブルに座ってしまった。

新歓ライブ

要は新入生歓迎ライブとは俺を含む今年入学した新入生を歓迎するための名前のまんまのライブだ。

そして、新入生の心を軽音部がキャッチするための最初のステージだと俺は思う。

なのに……

「何やってんだ？ユウ。こっちに来いよ」

「おい律！」

「そつだよーくん。クッキーおいしいよ」

「唯まで！」

「まあまあ澪ちゃん。とりあえず紅茶でも飲んだら？」

「ああ、ありがとうムギ……ずずっ」

「「あ、澪（ちゃん）飲んだ」」

「……ま、まあ本番前に心を落ち着かせるのも必要だよなっ
！！」

唯一の仲間だと思つてた秋山先輩が手なずけられたッ！！

お茶やお菓子は確かに必要なのかもだけど、本番前はさすがに自
粛してくださいよ……。

「ほら、何やつてんだ？早く来いよ、ユウ」

「そつだよーくん。私がゆーくんのぶんのクッキーまで食べちゃ
うよ？」

「くっ！この部に勢いで入部したのは判断ミスだったか！？まあい
いや。それより先輩たち練習しとなくていいんすか？」

「わかつてないな、ゆーくんは」

「そつだぞユウ。私たちはお茶しないと演奏できないんだぞ？」

「威張つて言わないでください。っつか、入部した途端に妙なアダ
名で呼ばないでくださいよ」

「ええ。べつにいいじゃん。ゆーくん」

「そつだ！結祐よりユウの方が呼びやすいじゃないか？」

「いや、そういう問題じゃ……」

俺がそう言いながら呆れた様にため息をついたそのとき。

コンコンッ。

音楽準備室の扉が誰かによって叩かれた。

誰かはわからないが、お茶中の先輩方は全く動きそうにないのでとりあえず俺は扉を開けてやった。

「はいはい？どなたですかい？」

「あ、生徒会の真鍋和まなべのどかですけど、部長・・・と言つか律いるかしら？」

「田井中先輩お呼びでっせ」

「はいはい」

そういいながら田井中先輩は真鍋先輩と廊下に出て行った。

それにしても驚いた。

扉を開けたら女子とか・・・ゾツとしたわ。

最近ものすごく目を逸らすスピードが上がってる気がする。

・・・それっていいことなのか？

と思いつつ、振り返ると目に入っただのはクッキーを食べる先輩たちだった。

はあ。

こんなんでも新歓ライブ平気なのかよ？

そう呆れながら伸びをして、ため息をつきながら下を向いた。

すると、琴吹先輩がいつの間にか俺を見上げていた。

・・・見上げる？

俺は見下ろす。

つまり、目が合っちゃってる？
そう自覚した瞬間、

「~~~~ツ？」ボンツ？

と、俺は頭が爆発したようにけむりを上げその場に倒れた。

琴吹先輩はそういうことしなれと思ったのに……。

と、俺が何かを考えることで意識をなんとか保ち復帰しようとしていたその時、俺は人の好奇心の怖さを知ることになった。

一方そのころ、私、田井中律は和から今日の新歓ライブの説明を受けていた。

「と、言う訳だから、みんなにも伝えてね」

「へーい」

「伝えることちゃんと覚えてるわよね？」

「大丈夫！！なぜなら私が田井中律だからッ！！！」

「ちよつと心配ね……。まあでも、さすがに律でも大丈夫よね」

「”さすがに”ってどういう意味だよ……。ま、田井中さんに任せとけて！！」

「それじゃあ、よろしくね」

そう言って持ち場に帰ろうと踵を返した和を私は見送った。

さて……。なにを伝えるんだっけ？

忘れちゃったZE

って言うのは冗談で、マジでなんだっけな？

と、ついさっきかわした会話を思い出しながら私は部室のドアを開けた。

すると、目に入ったのは、

白目をむいて倒れているユウと、それを笑顔でつつくムギと唯だっ
た。

「あ、りっちゃん！ゆーくんすごいんだよー！」

「そうなの！結祐くんどんなにつづいてもビクともしないの！！まるで石像みたい！！」

「や、や……め……。意識が……。と……。ぶ……。」

……。地獄絵図？

ってか、ユウ『やめて』って言おうとしてんじゃん。

なのに、ムギも唯も……

一体私がいらない間に何があっただよ！？

「お、おい澪」

「どうした？律」

「澪はこれを見て何とも思わないのか？」

「んー……」

澪はそう唸ったあと、テーブルに乗っているクツキーを1つ頬張りながらいたって冷静に私に言った。

「多分、これが軽音部の日常に加わると思っからいちいち驚いてた

「らキリがないかなーって」
「・・・・・・・・ついに溼まで」

「まったく、マジでやめてくださいね。目え合わすのも触れ合ったりするの俺ダメなんすから」

「ごめんね。ついやりたくなっちゃって」

「はぁ・・頼みますよホントに。ところで、田井中先輩。さっきなに話してたんですか？」

「聞きたいか？」

「もったいぶらないでくださいよ。どうせ新歓ライブ関係でしょ？」

「そうだぞ律。私たちなんだかんだで本番前なのにまだ練習してないだろ」

「しょうがないな。教えてやろう！楽器や機材の搬入だが・・・・私が講堂許可証とか出し忘れたせいで生徒会は手伝えないそうだし！」

「そんな！？りっちゃんそれじゃあ・・・・」

「ああ。アンプもドラムも自分たちで運ばなくちゃいけないな。・・

・・くっ！一体誰のせいで！？」

「お前のせいだろ律」

「・・・・・・・・てへっ」

「てへっ じゃない！！どうするんだよ？本番まで時間無いぞ。まだ通しの練習もしてないのに・・・・・・・・」

「そうね、衣装にも着替えてないしね」

「・・・・さわちゃんっ！？」「」「」

そう先輩が声をあげて見た先には、誰もいなかったはずなのに

つのまにか女性が座っていた。

”さわちゃん”と呼ばれていたが、確か音楽教師の山中さわ子先生……だった気がする。

生徒の間でも若くてきれいな先生で通っているらしい。

勇利曰く『あのスタイル！あの笑顔！長い髪！そして眼鏡！！全部が大人の女性って感じを引き立ててる！！』そうだ。

実はそのあと『いやゝ。生徒と先生の禁断の愛なんてのも……』と、アホみたい（実際アホだが）な事を言っていたので成敗したが……まあそんな回想は今必要ないだろ。

と、自らの脳裏から忌々しい勇利^{アホ}の記憶をもみ消していると、

「あ、あなたが新入部員ね」

と声を掛けられた。

突然だったのでちよつと驚いたが、ショートはしなかった。

女子に囲まれてるって言う最悪の環境のおかげだろうか……？
そう考えると思わず苦笑いがこぼれてしまいそうだったので、そのまえに返答をすることにした。

「えっと、邑園結祐です。たしか、山中先生でしたよね？音楽科の」
「あら？自己紹介はいらさないみたいね」

「まあ、一応先生方の顔と名前は覚えてますから。んで、その山中先生が軽音部に何の用すか？」

「ふっふっふ……見て驚けっ！！」

そう言つて山中先生が机の上に出したスニーカーの中には、チャイナドレスが入っていた。

チャ、チャイナドレスだとツツ!!とまではいかないが、少し驚いた。

でも、これを見せてどうするんだ？

そう俺が思つた瞬間。

「「「カツコーーーーー!!!!」」」

田井中&平沢&琴吹先輩が身を乗り出して叫んだ。

・・・俺的には服よりこつちのリアクションの方が驚いたわ。

「さわちゃんこれも作つたんだよな？」

「そうよ。大変だつたんだから」

「ふーん。作つたんすか・・・・つて作つたあ!?これを!？」

「モチロン!!私はどんな服だつて作れるわよ!」

「そうだよ。ゆーくんが部活見学しに来た時私たちが着てたメイド服もさわちゃん先生の手作りだよ!」

「へ、へえ・・・・」

恐るべき、山中さわ子!!

メイド服とか、チャイナドレスとか、並の人間じゃ作れねーぞ・

「ところで先生。コイツをどうするんすか？」

「なに言ってるの?着るのよ。唯ちゃんたちが」

「・・・・・・は？」

これを先輩方が着る・・・・？

ちよこつとチャイナドレスの先輩を想像してみた。

まあ、もともと美人だし似合わなくは無いな。

ただ、ちよつと着せるのは無理じゃないかと俺は思った。

何故なら、秋山先輩が山中先生登場から青ざめて動かないからだ。なんで青ざめているかは分からないが、先生登場と同時にこのチャイナドレスが関係していることは間違いないだろう。

例えば

着るのが恥ずかしいとか。

俺がそう思ったときだった、

「れ、練習しよう！！」

急に秋山先輩が立ち直った。

「ほ、本番まで時間無いし、急いで練習しよう！なっ！！」

「そんなこと言って。着たくないだけなんじゃないか？ 漣」

「そ、そんな事はない・・・・・・ような・・・・・・」

「やっぱそうじゃなか。まあ、そこまで言うなら漣は着なきゃいいんじゃないか？」

「え・・・・？」

「そうだよ漣ちゃん。無理に着なくてもいいんだよ？」

「そうね。漣ちゃんは恥ずかしがり屋さんだしね」

「私も、せつかく作ったものを着てもらえないのは残念だけど、漣

ちゃんのためなら涙をのむわ」

そんなみんなの励ましで秋山先輩は徐々に表情を明るくしていき、

「み、みんな……」

そう呟いたときには感動で涙目になりかけていた。
のだが、

「ま、でも一人だけ制服ってほうが帰って目立つかもな」
「そんなの嫌だあああゝ!!」

どん底に突き落とされた。

うんうん。

これが噂の『持ち上げといて突き落とす。持ち上げられた時ほど痛みは強い。』の”ちやほやの法則”か。

そう目の前で起こったことを考察していると、ふと山中先生の腕時計が目に入った。

現在の時刻は12:25。

新歓ライブは『新入生オリエンテーション』要は部活紹介の中に組み込まれているから、集合時間は13:00。

今から通しの練習に……確か3曲とか言ってたから多く見積もって大体20分くらい。

先輩たちの着替えと身だしなみに多く見積もって10分。

楽器類、必要な機材を運ぶのに短く見積もって10分。

合計40分……。

時間が足りねえッツ!!

その驚愕の事実に気がついた俺は先輩たちを見たが、相変わらずぎゃあぎゃあ騒いでいた。

・・・本来は右も左も分からない新入部員が偉そうなこと言うべきじゃないんだろうが、事態が事態だ。

迷ってられるか!!

「先輩!!」

「ん?ん?」

「ん?じゃないっす!!あと本番まで35分しか無いんすよ!!」

「大丈夫だよーくん。まだ35分もあるから」

「じゃあ聞きますけど、琴吹先輩、最後の通しの練習するのに何分かかります?」

「20分くらいじゃないかしら?」

「じゃあ先生。先輩たちの着替えに何分かかりますか?」

「チャイナドレスだからちよつと私も手を加えたいし・・・10分くらいじゃないかしら?」

「次、田井中先輩。楽器運ぶのに何分かかりますか?」

「私たちだけで運ぶからな・・・頑張っても10分はかかるんじゃないか?」

「それじゃあ、平沢先輩。練習、着替え、運搬、合わせて何分かかりますか?」

「えーと・・・40分かな?」

「それじゃあ、秋山先輩。本番まで何分でしたっけ!?

「35分・・・って」

「・・・間に合わないじゃん!!」

ここまで来てやっと気付いたんかい……。
つつか、俺の予想ドンピシャだったな。

ま、とにかく先輩たちはやっと気がついたみたいだし、練習時間でも縮めれば……。

「りっちゃんどうしよ!? 私一回本番前に通さないと分かんないよ
お……。」

「確かにそうだな。私もちよつと心配だな……。」

「なんだかんだで、今週は新入部員勧誘のことしか考えて無かった
もんね……。」

「じゃあ、やっぱり練習は縮められないよな……。」

なつにいいいいいい!?

アンタ達、普段何やってんだ!?

くっ! こうなりやあ……。

「じゃ、じゃあ、制服で出場して着替えの時間を無くせ
」

「それだけは許さないわよ……。」

「うわ! さわちゃん”失恋モード”だ!」

「し、失恋モード?」

「そうだよーくん。失恋モードのさわちゃんはだれにも止められないんだよ」

「着替えの時間を……私の努力をどうするってえ……。」

そう言ってるで『バオ・ハード』のゾンビのような動きで俺に近づいてくる山中先生。

非常に動きは気持ち悪いが、女性は女性。

あんま近づかれると・・・マズイ!!

「わ、分かりましたよ!!でもどうするんすか!?たしか軽音部は
トップバッターっすよ!遅れたら全体進行に支障が出ちゃいますっ
て!!」

「確かに結祐がいうことも正しいな」

「でも遷、練習も着替えもどうにも出来ないんだぞ?」

田井中先輩のその言葉でこの場にいる全員が黙り込んだ。
ぶっちゃん最悪の状況だ。

この間にも刻一刻と時間は迫ってるし、一体どうすりゃあ・・・

そう思った時だった。

「そうだ!!」

「なんか浮かんだのか唯!?」

「うん!!」

「なにになに?教えて唯ちゃん!」

「えっとね、一つ一つやって間に合わないなら同時にやればいいん
だよ!」

「同時に・・・?」

「そう!私たちが練習している間にアンプを、着替えている間に楽
器を運んじゃえばいいんだよ!!」

「でも平沢先輩。生徒会は手伝ってくれないんすよ?」

「そうだぞ唯。たしかにそれなら可能だけど、誰がやるんだ?」

「そうね・・・。たしかに私たちは動けないから、自由に動けるの
はさわちゃんぐらいよね・・・」

「私!?無理よ無理無理!!そもそも着替えの時は私がない

「

「違うよみんな。私たち軽音部にはもう一人部員がいるじゃん!!」

「「「「あ……………」」」」

その平沢先輩の言葉で、傍観者だったはずの俺は急に話しの中心に放り出された。

つてか、この流れはまさか…………

「お、俺一人で…………!?!」

いやいやいや、絶対無理でしょ!!

一人でドラムもアンプも全部運べるわけ無いじゃん!!

そんな悲痛な思いを込め、俺は唯一目を合わせられる田井中先輩の目を見つめた。

すると田井中先輩はとたんに優しく微笑んで俺に言い放った。

「ユウ…………頼んだぞ!!」

こうして俺の高校生活初の肉体的死闘が幕を開けた。

ライブまで残り30分!!

第四話 ？新歓ライブ！！ - 前編 - ？（後書き）

次回は・・・

『あなたも大変ね・・・』

『目のやり場がねえええ！！』

『よっしゃー！！いくかー！！』

『あの、入部希望・・・なんですけど・・・』

次回【新歓ライブ - 後編 - 】

第五話　？新歓ライブ！！ - 後編 - ？（前書き）

新歓ライブ後編です。

曲名や歌詞は、著作権保護法に触れるため虫食いや一部のみとなつています。

ご了承ください。

それでは、どうぞ。

第五話　？新歓ライブ！！ - 後編 - ？

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

現在、俺、邑園結祐は自分との死闘を繰り広げていた。
しかも、二種類の。

一つは肉体的死闘。

要はアンプ運びなわけだが、山中先生から台車を貸してもらっても重たいものは重たい。

しかも階段は台車ごと担がなくてはならないのだ。

アンプだけであともう一往復しなきゃなんねえのかよ・・・。

次にもう一つの死闘。

それは

「目のやり場がねえええつつ！！」

精神的死闘。

つつても、普通ならこの状況でそんな戦いは起こらない。

はすだけど・・・なにしろ俺は女子と目があっただけでショートするようなかわいそうなスキル(?)を持っているため、この女子で溢れかえった廊下を通るのは相当きついのだ。

しかも、俺は今台車でアンプを運搬中。

どの方向からも好機の目が絶えねえええつつ！！

「くっ！！耐えるんだ邑園結祐！！お前はできる男だッッ！！」

そう叫びながら俺はひたすら講堂へと走った。

こんにちわ。

平沢憂です。

今日は私が見る初めてのお姉ちゃんのライブです！！

「純ちゃん。一緒にライブ見に行かない？」

「ごめんね。憂。私ジャズ研に入部したから、そっちの手伝いがあるって・・・」

「あ、そうなんだ・・・」

「ごめんね憂」

「ううん。気にしないで！」

「ホントにごめんね。それじゃあ、私行くね」

そう言って純ちゃんが教室を出ようとした時でした。

『耐える俺えええーッッッッッッッッ！！』

と叫びながら凄い速度で何かが通り過ぎました。

よく姿は見えなかったけどあれは・・・

「ねえ、憂」

「なあに？純ちゃん」

「今のって結祐だよな？」

「うん。そうだと思うよ。たしか結祐くん、軽音部に入部したってお姉ちゃんが言ってたから」

「へえ……あの結祐がね……。まあ、いつか。それじゃあ、今度こそ私行くね！」

「うん！ジャズ研頑張ってね！」

そう言いながら手を振って私は純ちゃんを見送りました。

さてと、じゃあ一人で見に行こうかな……。と席を立った時でした。

たまたま、鞆を持ち上げてどこかへ行こうとする女の子が見えました。

確か、中野梓ちゃんだったかな……。？

せつかくなので私は誘ってみることにしました。

「あのっ!!」

「あなたも大変ね……」

それが汗水たらしてアンプを運んできた俺を見た真鍋先輩の率直な感想だった。

「軽音部に入部して大変じゃない？唯から聞いたわよ。すぐに気絶しちゃう面白い後輩が入部したって」

「まあ、気絶しちゃうのに関しては何部だろうがこの学校に入った時点でアウトだし、それに、俺が決めた道だから。途中であきらめ

んのはカツコ悪すぎですしね」

「偉いのね」

「真鍋先輩には敵いませんよ。っつか、平沢先輩から聞いたってことは俺がどんな条件でシヨートするかもご存知で？」

「ええ。目を合わせたりすると駄目なんでしょう？だから今も下向いてるのよね？」

「ご理解とご協力感謝します！！それじゃあ、俺続きがあるんで」
「ええ。頑張つてね」

そう言ってくれた真鍋先輩に軽く手を振って俺は部室へ向かった。

そして現在12：58。

結局俺はあの後、二台目のアンプ、ドラム、キーボード&ギター&ベースを運ぶために三往復もした。

一応俺は中学時代、陸上部だったのでまあ体力はあると思ってたのだが……

「やつぱり半年以上空くと体力もなくなるわな……」

「お疲れ様。後は唯たちを待つだけね」

「そ、そうっすね……」

「大分疲れてるみたいね。とりあえず、水でも飲んだら？」

そう言つて真鍋先輩は俺にペットボトルを差し出した。

真鍋先輩、メツチャいい人だ！！

「ありがとございます！！あ、でもこれまさか……」

「ああ、大丈夫よ」

真鍋先輩がそう言うので俺は有難く水を一口いただいた。
その瞬間、

「まだ私しか口付けて無いから」

・・・ボンツ!!

だから、それを懸念してたのに・・・。
大丈夫って言ったじゃん！この裏切り者ーーーー！！

そう言いたかったが、意識が朦朧としてうまくしゃべれない。

ただ、真鍋先輩は俺がショートしたことに気がつかず、喋り続けていた。

「邑園君が気にしてたのって関節キスのことでしょ？私そういうの気にしないから大丈夫よ。だから、遠慮せずに飲んでね」

そう言っつて真鍋先輩はやっと俺の方を見た。

白い蒸気を存分に上げて気を失いかけている俺を。

「・・・あれ？」

おそらくとても見慣れた光景とは言えないからだろう。
いつも落ち着いている真鍋先輩がそう腑抜た声を出した時、ちよ
うど軽音部が到着した。

そして困惑している真鍋先輩に向かって秋山先輩が一言。

「和・・・・・・・・今度から気をつけような」

そしてついに迎えた13:00。

俺もなんとか1分で意識を回復させ、やっと軽音部は全員集合した。

チャイナドレスで。

「よーし！！全員準備は良いな！？」

「だ、大丈夫！」

「大丈夫よ」

「私もギー太も絶好調！！」

「ユウはどうなんだ？」

「まあ、絶不調ではないっす」

「それでよし！！」

そう言って田井中先輩は俺にニツと笑うと、ドラムスティックを頭の上にあげ叫んだ。

「よっしゃー！！行くかぁー！！」

13:00。

お姉ちゃんのライブを見るために私は講堂に来ていました。

さつき誘った中野梓ちゃんと一緒に。

「ごめんね。付き合わせちゃって」
「ううん。大丈夫」

そう言った梓ちゃんは何だかつまんなそうでした。

何か、誘わないほうがよかったかな？

そう私が思った時。

ステージの幕が上がり始めました。

俺は先輩たちの演奏を舞台袖で聞いていた。

最初の曲は『ふ　ふ　時間』。

名前も歌詞もメルヘンチックな曲で、俺が始めて聞いた曲でもある。

〃　〃

と、平沢先輩の声が会場中に鳴り響く。

やっぱりあんまりうまくないな。

俺は苦笑いしていた。

でも、

『~~~~~どうにーかーなるよねっ!!』

やっぱり引き込まれるな。

そんなことを再確認している間に、一曲目が終わってしまった。

確か、一曲目の間に部活紹介入れるって言ってたな。

そう考えている間に、平沢先輩のMCが始まる。

……あの先輩、若干抜けてるけど大丈夫か？

『え〜。新入生のみなさ「キーーーーーンッ」あわわ……。』

大丈夫じゃ無かった！！

頼みますよ、平沢先輩！！

これで部員獲得できないと、1年生俺一人になっちゃうからっ！！

『えっと、改めまして。新入生のみなさん。ご入学おめでとうございます！そして、今日は私たちの曲を聞いてくれてありがとうございます！』

そこまで言ったところで俺はちよつと心配になって、舞台袖から出て観客を見てみた。

怪訝な目で見てる人はいないっばいから、まあ大丈夫が。

つつか、むしろチャイナドレス効果で好機の目で見てる人が多いな。

『私たち軽音部は現在5人で活動しています。せっかくなので部員も紹介しておこうと思います』

案外平沢先輩はMCうまいんだな。
聞いてて安心する。

そう感心しながら、俺は再び舞台袖に戻る。

『まずは、ベースの秋山澪ちゃんです。澪ちゃん一言どうぞ』
『え、えっと。秋山……澪……です』

” かわいーっ！！ ” という歓声がまばらに起こった。
だてにファンクラブがあるわけじゃなっただけのことか。

『次に、キーボードの琴吹紬ちゃんです』

「 〽 琴吹紬です 今やったようにキーボードをやってます 〽
『ありがとうムギちゃん。それじゃあ次は、我らが軽音部の部長にしてドラムの 〽
『田井中律だ！！』 ダダダンッ！！ 〽

田井中先輩が叩いたドラムに合わせて、 ” カッコいー ” という歓声が巻き起こった。

田井中先輩ナイスッ！！

さて、それじゃあ後は平沢先輩が紹介して二曲目、三曲目突入かなんとか行けそうだな。

俺が安堵の息をついた時だった。

『ありがとねーりっちゃん。えっと次は、みんなと同じ1年生です』

という、謎のMCが始まったのは。

明らかにおかしいよね？

俺演奏すらしてないのに、っつか入部したの昨日なのに、なにやりこれって1年生のためのライブなのに、何故ここで俺を出す！？

そんな俺の気も知らず平沢先輩はMCを続ける。

『今はまだ何の楽器もやって無いけど、今日ここに楽器を運んでくれたのはその一年生です』

待て待て待て待て！！

この流れは舞台に出なきゃいけないパターンじゃねえか！
無理だからね！俺がこのタイミングで出るのもおかしいし、まず第一俺は舞台なんかに出たら突き刺さるような視線に負けてショートだっつーの！！

そう嘆きながら頭を抱えた瞬間。

隣の真鍋先輩が、俺に向かってこう言った。

「観念したほうがいいわね」

「仰るとおりです……うう……」

『それでは出てきてもらいましょう！ 邑園結祐くんです！！』

……覚悟は決まった。

俺、いざ出陣！！

と、意気込んで俺は舞台に上がった。

『それじゃあ、ゆーくん一言どうぞ』

「・・・・・・・・」

『あれ？ゆーくん？』

「・・・・・・・・」

『・・・まさか！唯とりあえず続ける！ユウはもう駄目だ！！』

『え？わ、分かった！え」と、ゆーくんはあの・・・その・・・』

ざわつく新入生を必死に平沢先輩がなだめるのと同時に、俺の残された意識は消え去った。

「ほんとにすいません！！」

「いや、そんなに謝んなよ・・・」

「でも、俺がショートしたせいでライブを台無しにしちまって・・・」

「いや、あれは私たちの不注意もあるから、結祐が気にすること無いよ」

「いや・・・ほんとにすいません」

もう謝るしかなかった。

何故なら、俺がショートしたせいで雰囲気は台無し。

加えて、時間が押してしまつて二曲しか演奏できなかったんだから。

謝つても、謝りきれねえよ・・・。

これで新入部員来なかったらどうしょ・・・。

「とりあえずお茶にしましょうか」

「そうだな！クヨクヨしててもしょうがないしな！！」

そう先輩たちは俺を元気づけようとしてくれているが、入部二日目での失態。

簡単には立ち直れねえよ……。

とはいえ、折角の好意を無視するわけにもいかないのでとりあえず席に着く。

「……やっぱ入部希望者来ないっすね。はあ……。」

「まあ、新歓ライブがあんなことになっちゃったしな」

「律！！」

「う、嘘だよ……。」

「いやいや、田井中先輩の言う通」

コンコンツ。

それはドアをたたいた小さな音だったが、一瞬で俺たちの口を黙らせた。

入部希望者かも。

そんな期待が俺たちの中で渦巻く。

が、いつまでもドキドキしてほっとくわけにもいかないので、田井中先輩がドアに向かって言った。

「どうぞー」

すると、ドアがゆっくりと開いて、

「あの、入部希望なんですけど……。」

「い、今なんと?」
「入部希望です」

その言葉を聞き先輩たちの表情が一気に明るくなる。
もちろん俺も、気絶後特有の酔った時のようなグラグラする視界でドアを見て、表情を明るくした。

うーん、でもあのシルエットどこかでみたような?

そう俺がぐらつく視界で出入り口を見続けていると、田井中先輩がたちあがった。

そして、

「確保ー!ー!ー!」

「きゃあああああ!」

と、叫びをあげる入部希望者に無理やり抱きついた。

おいおい、んなことしたら逃げちゃうんじゃない・・・

そう俺が懸念を抱いたその瞬間。

俺のぐらつく視界がきつちり新入部員の顔を捉えた。

特にこれといって琴吹先輩のような特徴は無かったが、長い紺のツインテールが特徴的な女子・・・・・・ってあいつは!!

「梓あ!」

その俺の叫びに反応して新入部員が俺の方を向く。

目がぱっちり合ったけど、ショートしない。
やっぱり梓だ。

と、確信は一応得たが念のため確認しておこう。

「お前、中野梓だよな？お前、なんでこの学校にいるんだよ？」

「それはこっちの台詞！！結祐こそなんでこの学校にいるの！？ここ元女子高だよ！？」

「そ、それは色々あったんだけど、とにかく良かった！！入部してくれたことも、梓がこの学校にしてくれたことも！！」

「・・・えっと、お二人さん。盛り上がってるとこ悪いんだけど、知り合いなの？」

田井中先輩のその質問に対して、俺と梓は目を見合わせた。

別に隠すことじゃねえよな？

そうお互いに確認すると、ありのままを言った。

「俺（私）たち、幼馴染です」「」

第五話 ？新歓ライブ！！ - 後編 - ？（後書き）

次回は・・・

『放課後が楽しみでした！！』

『”ツンデレ妹属性の中野梓ちゃんだろ！？”』

次回、【新入部員？】

第六話 ？新入部員？？？（前書き）

第六話です。

相変わらず、いや、いつも以上の駄文ですいませんm（
—
—
）m
それでは、どうぞ。

第六話　？新入部員？？？

これはいつもの登校中。

俺はこの春、隣の市から引越してきてご近所さんになった悪友、篠原勇利と歩いていた。

「なあ勇利」

「ん？どうしたんだよ結祐？俺の顔をじっと見つめちゃって」
「・・・」

「な、何なんだよ！？僕の顔なんかついてる？」

「・・・いや別に」

「じゃあなにさ？はっ！！もしかしてカツコよすぎるmeの顔に惚れた！？」

「んなわけあるかアホたれ」

「じゃあなんなんだよ？そんなに顔を見つめられるとウチ照れちゃうんだけどww」

そう言つて勇利は顔を両手で覆つて左右に振つた。

ぶつちやけ気持ち悪い。

つと、俺が言いたかつたのはそんな事じゃ無かつた。

「あのさあ、アホみてえに舞い上がつてゐる所悪いだけだよ」

「ん？何？」

「お前のその一人称を変える癖、治んねえの？」

「・・・あれ？また変わつてた？」

「ああ。ばつちり変わつてたぞ」

「マジかよ」。これでも小生気にしたつもりだったんだけどな」

「お前の一人称の守備範囲は広すぎだろ・・・」

俺はそう呆れながらずれ落ちたスクールバックを担ぎなおす。

その隣では勇利が”うゝん・・・何で変わっちゃうんだろうな”と呟きながら歩いている。

そんな俺たちはそれぞれちょっとした癖で中学時代こう呼ばれていた。

『残念イケメン』と。

??????

時と場所が変わって、ここは俺の教室。

まだ朝早いので、今は勇利と俺しかいない（と言っても勇利はクラスが違う）。

まあ、いつも一番乗りなんだけどな。

「そんなこともあったなあゝ。『残念イケメン』なんて言われたことが」

「俺も勇利も変な能力っつーか、変な癖っつーか、まあ残念と言われて思い当たる節はあるよな」

「だな！俺は一人称がおかしくなるし、結祐は女嫌いだもんな」

「別に女嫌いではねーけどな」

「お？じゃあ結祐も彼女とかほしかったりするの？ww」

「・・・思っちゃ悪いか」

「べっつにゝ じゃあなおさらそれ治さないかねゝ」

「お前もな」

そう言っ て俺たちは顔を見合わせた。

っつか、俺も勇利もイケメンなのか・・・？

勇利を見ても鏡を見てもそうは思わねえんだけど・・・。

と軽く首をかしげると、どうやら勇利も同じことを考えていたらしく、

「やっぱ結祐イケメンって程じゃないな。俺もだけど」

「だよな！そもそもイケメンの『イ』の字もねえもんな」

「うん。だよな。なのに残念とか言われちまって。あんまりだよなあ」

「まあ、それも中学時代の話だけだな」

「だな！今となっちゃ俺はただの変人。結祐はただの変態だもんない！」

「勇利、お前には死んでも言われたくねえよ・・・」

そう、なつかしく悲しい『残念』時代を思い出し俺たちが笑いあっていた時、教室のドアががらつと開いた。

「あ、結祐。おはよう。っていうか、クラス一緒だったんだね」

「ああ、梓か。どうやらそうみてえだな。俺もビックリだわ。つかどうした？早いな」

「うん！今日は初めての軽音部だから早く学校に行きたくて！」

「あ、そっか。今日から練習だもんな。梓はギターか？」

「うん。小学生のころからやってるしね」

そう言いながら、俺の右斜め前の席に梓は座った。

席近っ！！。

多分、初日の自己紹介とか日中はほとんど気絶して保健室だったから分かんなかったんだな、お互いに。

そう思っていると、梓が自分の席に荷物を置いてこっちにやってきた。

「結祐はなにをやるの？」

「まだ決まってるねえよ。とりあえず俺音楽知識0だし、先輩たちに聞いてから決めようと思ってな」

「そっか。それにしても、結祐が昨日舞台上がった時はビックリしたよ。最近会わないな」とは思ってたけど、まさか同じ学校のおんなじクラスとは思わなかったし」

「それは俺も」

「ちょっと待ったあ！！！」

今まで呆けていた勇利の横やりの一撃によって俺の言葉は遮られた。

つか、声でか！

梓までビクッちゃてんじゃん。

「結祐君。これはどういうことだい？」

「どうもこうも何が？」

「だ・か・ら。いつからお前はこんな可愛い女子と喋れるようになったんだよ！？ずるいぞオイラを置いて！」

「ああ・・・そういうことな。そっぴゃお前は梓のこと知らないもんな」

「いや。名前と顔は知ってるぞ！小柄な体と若干ツンツンしていいそのな雰囲気だ」ツンデレ妹属性”の異名を持つ中野梓ちゃんだろ！？一部の男子に人気なんだぞ！！！」

「へっ！？そ、そんな・・・」

「おいおい、なにを言ってるんだお前は。梓照れちゃってんじゃないか」
「照れてる姿も可愛いなあ・・・。ってそんな事は今はいい！！」
問題はなぜそんなに可愛い梓ちゃんと貴様のようなヘタレクズ野郎がつるんでんだってことだ！！」

勇利はそこまで一度もかまわずに言いきると、”うわあああああ
あ”と言いながら頭をかきむしり始めた。

梓は梓でまだ照れっぱなしだし。

なんなんだこの光景・・・。

でもまあ、勇利がそう言うのも仕方ないよな。

確かに梓と俺は幼馴染だけど、梓は市立の中学校。

俺と勇利は私立の中学校だったから、直接的に勇利と梓の接点は無かったしな。

そりゃ、勇利から見れば俺が梓と喋ったりしてんのは不思議に感じるわけだ。

ましてや、幼馴染だから梓じゃショートしねえしな。

なおさら不思議だったんだろうな。

そう考察したところで、とりあえず俺は悶えている勇利を鎮めることにした。

「えゝとなあ、勇利」

「なんだよっ！裏切り者！！」

「いや、俺は別にお前を裏切ったりなんかしてねえよ。俺と梓はただの幼馴染だから」

「へ？」

「だから幼馴染。生まれた病院も幼稚園も小学校も一緒だし、家も道を挟んで隣なんだよ。な？梓」

「え！？あ、うん。そう。そうだよ！」

「じゃ、じゃあ、お前は俺を置いて行ったわけでも、梓ちゃんをGETしたわけでもない？」

「もちろん」

「よかったあー！！吾輩てつきり梓ちゃんと結祐はそういう関係かと……」

「アホだなあ。勇利」

「ああ！俺がアホだった！！結祐！やっぱりお前は最高の友達だ！！」

そう言いながら、勇利が俺に抱きつこうとしてきたため、俺はそれを足で蹴り飛ばして防ぐ。

そんな状況をちょっと引き気味で見つつ梓が俺に尋ねてきた。

「あのさ結祐。その人は？」

「ああ、こいつは篠原勇利。見ての通り変な奴だけど根っこはいいやつだから。仲良くしてやってくれ」

そう言つて俺は勇利を梓の前に突き出した。

梓はちよつとうつろたえていたが、俺の目を少し見るとおずおずと自己紹介を始めた。

「中野 なかの梓 あずさです。え〜と……」

「篠原勇利です！！勇利って呼んでください！！」

「え〜と……、じゃあ、私も梓でいいよ」

「マジで！？やった〜！！それじゃあ、よろしくね梓ちゃん！！」

「うん。よろしく勇利。ところで、さっき言ってた事なんだけど・・・ホント？」

「ほんとだよ！梓ちゃんホントに一部の男子に人気あるから！！」

それを聞いて梓は再び照れ始めた。

ま、でも勇利のその情報は嘘じゃないだろうから俺が何か言う必要もないだろ。

にしても、勇利もよく堂々と言えたもんだな。

そもそもこの学年男子が25人しかいないから、一部んて言ったら精々1〜2人だろ？

それに気がつけば、あんなの勇利が梓のこと好きだって言ってるようなもんじゃねえか。

まあ、気がつかれないようにそう言うこと言うのは勇利の得意分野だしな。

つつか、何人にあんなこと言ってたろう・・・・・・？

と、俺がうれしそうにしている勇利と若干引き気味の梓を見て苦笑いしていると急に先生の声が飛んできた。

「お前ら、何やってんだ！？今日は朝会だから登校したら荷物持ったまま講堂に集合だぞ！！」

「あ、そっぴや、この学校って朝会の時教室に荷物置かずに直で行くんだっけ？」

「つべこべ言わんで早く行けっ！！」

「・・・は、はいっっ！！！！」

そう3人そろって叫びながら俺たちは講堂へ向かった。

?????

時と場所が再び変わって放課後。

勇利はあの後休み時間になるたびに俺のクラスに来て梓や憂と話していた。

ま、仲良くなったんならそれでよし。

「んじゃ、行くか」

「うん。早く行こー!」

梓はそう言っで、まるで子供のようににはしゃぎながら音楽室へ走って行ってしまった。

と、思ったら、

「結祐、はやくー!」

階段とこで待っていたのか。
「まったく、しゃーねーなあ。」

「今行くって」

「楽しみだなー軽音部。どんな練習するんだろ?」

「そうだなー。例えば、お茶を」

「言わないで結祐!!私の目で確かめたい!」

「……気合入ってんなー」

「だってあんなに感動する演奏できるんだもん!きつと凄い特訓とかしてるんだよ」

「前半だけ同意しといてやるよ」

そう他愛のない会話をしているうちに部室の前についた。
のだが、梓は緊張しているらしくドアを前にして止まってしまった。

……マジで子供かよ。

そう思いつつ、俺はドアを開けた。
その瞬間、

「こんにちわ!!」

梓が部室に飛び込んだ。

ドアが開いたら俺は用済みかよ。

「こんにわーっす」

「おお！二人とも来たか！」

そう言ったのはおでこ特徴的なドラム担当の田井中先輩。

ボーイッシュな先輩で、身内と梓以外で唯一俺がショートしない人物だ。

他にも憂の姉の平沢先輩、まゆげ（剛毛ではない）が凄い琴吹先輩が既に来ていた。

ちなみに田井中先輩だけしっかり説明したのは、田井中先輩のみ直視することができるからだ。

ふ……何たる悲しい事実。

「お、おいユウ。なんか哀愁漂ってるけどだいじょうぶか？」
「え？大丈夫つすよ」

以後ナーバスにならないよう気をつけよう。

「それにしても、梓は元気いっぱいだな」

「はい！放課後が楽しみでした！！」

「そっか。それじゃあとりあえず」

「練習ですか！？」

「お茶にするか」

「え・・・？」

そう呟いた梓はホントに拍子抜けした顔をしていた。

しかし、梓は新入部員。

先輩に無理に逆らうこともよろしくないの、おとなしく席に着いた。

もちろん俺もだ。

そのあとはもう梓が何か言う隙は無かった。

「はい、梓ちゃんも、結祐くんもどうぞ」

「あざっす」

「ありがとうございます」

とお茶が配られ、

「お菓子もどうぞ」

とケーキが置かれ、

「わーい ケーキ」

「うまそー」

「ありがとなムギ」

「いいのよ」

といつの間にか合流した秋山先輩を含む先輩が全員食べ始めてしまったからだ。

「あの、これって・・・」

「ああ、梓も食べるよ。おいしいぞ」

「いや、だからその・・・」

「なんか不満なのか？梓。先輩たちに言えば多分コーヒーも紅茶もミルクティーも出てくるぞ」

「いや、結祐。そうじゃなくて。音楽室をこんな事に使っているのになって・・・」

梓はそう言いながら下を向いた。

・・・これはヤバいかもな。

今までの経験で俺はそう思った。

何故なら、梓は真面目すぎるからだ。

それゆえ、このような気が抜けた状況に長く居座ると我を忘れて暴走することがしばしばある。

最初から懸念はしてたが、思った以上に気をつけないとな・・・。

そう俺が心の中で決意した時、

ガチャ・・・

と、山中先生が入ってきた。

それを見て梓が急に強張る。

きつと、音楽室でお茶していることを怒られるとも思ったのだろつ。

「あ、あの先生これは・・・！！」

「あ、私ミルクティーね」

「あれ？先生・・・？」

再び梓が拍子抜けした表情になる。

これはヤバイ、やばすぎる・・・！！

「あ、新入部員よね？」

「あ、はい。中野梓です」

「私は顧問の山中さわ子です。よろしくね」

「顧問だったんすか！？」

思わず横槍を入れてしまった。

だって、顧問なんて昨日は一言も言っただけだったし。

「あら、結祐くん知らなかった？」

「初耳つすよ。俺、てっきりただの変態音楽教師としか『おいコラ！』・・・嘘つす」

「それにしても新入部員か。春ねえ」

「新しい彼氏できたかさわちゃん？」

「余計なお世話よ！ほつといて！！」

「ごめんごめん。悪かったて」

「そういつりっちゃんはどうなのよ?」

「私はそういうのは……………」

……………ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!

俺もついついこのムードに乗っちゃったけど、これはまずい。

梓が、暴走しちゃう……………!!

そうお思いつつ、ちらつと梓を見てみるとなんだか難しい顔をしていた。

どうした?

そう声をかけよとした瞬間、梓は急にすくつと立ち上がった。

そして迷わずギターを肩にかけ、

ジャン

「うるさぁーい!!」

怒号が飛んだ。

……………これは予想外だ。

梓が暴走せずにギター弾き始めたのもそうだし、山中先生が怒ったのに関してはもう意味不明だ。

と、とりあえず、梓だ。

泣きだしたらかなわねえ……………!

そう思い俺は梓に駆け寄ろうと思ったのだが、既に秋山先輩がフオローに回っていた。

じゃあ、先生の方をと今度は先生の方をみたのだが、先生は先生

で田井中先輩に怒られていた。

やっぱ大事な後輩のこととなれば怒るよな。

ま、なにはともあれ先輩たちのおかげでなんなく収束できそうだ。

そう安堵の息をついた瞬間だった。

「こんなんじゃ駄目ですーっ！っ！」

ああ、はじまつちやった・・・。

「あ、梓がキレた!?!」

「ユウ幼馴染だろ!?!どうにかしろ!?!」

「こつなつたら止めようがないっす」

「そんな!?!」

そう絶望している田井中先輩をよそに梓の暴走は加速する。

「皆さんやる気が感じられません!?!」

「「「「「うっ・・・」」」」」

「ま、まあ梓。先輩たちも昨日新歓ライブだったんだし・・・」

「関係ありません!?!それに音楽室を私物化するのもダメです!?!
ティーセットは撤去すべきです!?!」

「て、撤去・・・」

「それだけは勘弁を・・・」

「何で先生がそんなこと言うんですか!?!」

「ま、まあ、落ち着けて」

「これが落ち着いてられますか!?!」

あゝ・・・。

もう俺の手には終えねえ。

・・・あと10分は続くかな。

俺がそう思ったその時、

「落ち着いて」

と、平沢先輩が梓を後ろから優しく抱きしめた。

「「「いや、そんなに収まるわけ」「」」

そう言うかけた時、

「はうわ」

「「「落ち着いてる!」「」」

??????

「さつきはすいませんでした!」

まさかのハグで正気に戻った梓の第一声はそれだった。

対して、田井中& a m p ;平沢両先輩の第一声は、

「大丈夫だよ、気にしてないから」

「いや、気にしましょうよ・・・」

「そうだな。梓の言うことも一理あるしな」

そう秋山先輩が味方についてくれた。
が、梓は相変わらず下を向きっぱなし。

そうとう後悔してんだろつな。

とにかく今後はこういうことがない様にしねえと。

そう決意し、生意気と言われるのを覚悟で練習しましょうというつもりだったのだが、秋山先輩が代わりに言ってくれた。

「これからはもっとやる気だして出していけないとな。わかりましたね!？」

「「「はぁーい」「」「」

こうして、梓の軽音部デビューは最悪の状態が始まった。

第六話 ？新入部員？？？（後書き）

次回は・・・

『はあゝ・・・・・・・・。行きたくないな』

『はわわわわわー！ー！ー！っ！ー！ー！』

次回「新入部員？」

第七話 ？新入部員？？？（前書き）

新入部員？です。

読んだら感想くれるとうれしいです。

それではどうぞ！！

第七話　？新入部員？？？

またまたこれはいつもの登校風景。
ただし、メンバーは増えたけど。

「はあ．．．．。今日は部活行きたくないなあ．．．．」

「そんなに落ち込んでどつたの？梓ちゃん？」

「ちよつとね．．．．あ、『梓ちゃん』って呼ばれると変な感じがするから、『梓』にしてもらうていい？」

「え？まあ．．．．意識してみるよ。それより本当に大丈夫？僕でよければ相談に乗るよ？」

「あゝそのへんにしとけ勇利。誰だって話したくねえ事はあるだろ」
「まあ、それもそうだね。じゃあ、なんかあつたら小生に相談してね」

「小生．．．？なにそれ？」

「そんな梓に結祐くんの分かりやすい解説」。『小生』とは古文な
どで使われる一人称のひとつです！！」

「勇利は古文にはまつてるの？」

「吾輩？はまつてるわけ無いじゃんか」

「今度は吾輩．．．！？」

「再び結祐くんの解説」。勇利は一人称を無意識に変えてしまうと
いう摩訶不思議な癖を持っています。ちなみにそのバリエーション
は今まで確認したもので6種類！！．．．．ぐらいだったきがす
る」

「へ、へえ。なんか面白い癖だね」

「そんなことないよ。これのせいで気持ち悪がられたり残念とか
言われたり．．．．拙者はいつも気をつけているのになあ」

「「拙者！？」」

こうして、他愛のない会話から俺たちの一日はスタートする。

??????

「終わったーっ!!」

HR終了のチャイムとともに俺はそう叫んでいた。

先生の目の前で。

いや、正確には、俺が身体を起こして叫んだら目の前に先生がいたってほうが正しいかな。

………うう。

ベテラン教師特有の冷たい目線が痛い。

くそっ！こうなりや、何か言っしかない！！

「先生、また今日は一段と老けてますね」

「はぁ……。全く誰のせいだと思っとなるんだ……。もういい。号礼は無しだ、これでHRを終わる」

そう言っつて、先生は深いため息をつきながら教室を出て行った。
ありやあまた老けるな。

「それにしても、勉強つてめんどくせえな」

「しょうがないよ。それより結祐くん！今日は一回も気絶しなかったね!!」

「確かにそうだな。つっても、ほとんどの授業寝てただけだな」

「それはよくないと思うけど……。でも結祐くんちよつとずつ治つてきてるみたいだね。軽音部の影響？」

「ああ……。それが大きいな。特に憂、お前の姉ちゃんは無自覚に目を合わそうとしたり、面白がって手を繋ごうとしたりしてくる

もんだからたまんねえよ」

「それは確かにたまらんな！」

「「勇利（くん）！？」」

ほんとにコイツは神出鬼没だな。
でもまあ、楽しいやつだからいいけど。

「いいなあ 結祐は」

「何がだよ？」

「軽音部だよ軽音部！お前以外全員女子だろ？たまらんだろ！！」
「確かに、私も学校で放課後までお姉ちゃんと一緒にいれるなんて
思うと・・・いいなあ」

「お、憂ちゃん！話しが合うね！！」

「そうだね！そういえば何で勇利くんは部活に入らないの？」

「確かにな。憂は家の家事があるって理由があるけど、暇人勇利に
は無いもんな」

そう俺が若干皮肉をこめて言うのと。

話しに入るタイミングをうかがっていた梓が口をはさんだ。

「勇利はちよつと変な子だからどの部にも入れなかったんじゃない
の？」

「ひどいよ梓！俺そんなに変な奴じゃないよ！！」

「「どーだかなー？」」

「結祐まで・・・！！ヒドイよっ！！よってたかつて某をいじめて
何が楽しいんだ！？」

「お、某だつて。新種の一人称だ」

「人の話を聞いてよ・・・」

そう呟くと、勇利は俺の席に突っ伏してしまった。
だが、梓と俺は大体勇利という人物像を分かっているので勘
も特に相手にしない。

そんな俺たちの代わりに憂が勇利を元気づけていた。

いや、元気づける前に、憂が声掛けた時点で”憂ちゃんあ
りがと”と復活していた。

本当に根っからの女好きだなコイツ。

ほんとに彼女作る気あんのかよ・・・？

そう俺が呆れたようにため息をついたとき、同時に隣で梓も
ため息をついていた。

まあ大体予想はつくけど。

「昨日のことか？」

「うん・・・。昨日迷惑かけちゃったから、あんまり行
きたくないなあって・・・」

そう言っ梓は、うつむいてしまった。

真面目すぎなんだよな昔から。

だから、考えすぎちゃうんだろう。

ま、そういうときは俺が背中を押してやらねえと。

俺はそう思うとスクールバックを肩にかけ、梓の手をつか
んだ。
突然のことに梓は若干戸惑っていたが、俺は気にせず梓
の手を引っ張った。

「何やってんだ。行こうぜ」

「でも・・・」

「でもじゃねえ。どの道行かなきゃ始まんねえだろ？」

「そうだね。でも先輩方怒ってないかな？」

「なあに、俺がついてる。そんなきゃなんとかしてやるよ！」

「・・・ありがと結祐」

そう梓が呟いたのを聞き、俺はもう一度梓の手を引っ張った。
今度は抵抗なく梓もついてきてくれた。

さあて、先輩たちのことだから怒ってはないだろうけど・・・
さすがに今日も練習せずにお茶なんてことはないよな？

そう一抹の不安を覚えながら俺と梓は部室へ向かった。

そのとき、勇利の殺すような視線が俺の背中を貫いていた気がしたけど、まあ気のせいだよな。

・・・そう信じることにした。

??????

「こんにちはー」

「こんにちはーって」

「（全然懲りてない！！）」

思わず、梓と全く同じリアクションをとってしまった。
でも、またお茶してんだもん。
昨日あんだけのことあったのに・・・。

「先輩、練習はどうしたんすか？」

「「「はわわわわわわー！ーっ！ー！」「」」

驚きすぎだろ。

ま、でもこれで練習に繋がるなら良しか。

「い、今からやろうと思ってたんだぜ！ー！」

「そ、そうだよ！ね、ムギちゃん！」

「そうそう！ー！」

「あの、やる気があるのは結構ですけど、見苦しいっすよ」

「な、何かな？」

「と、とにかく練習しよー！ー！ー！」

田井中先輩のその掛け声で”おー！”と言いながら平沢先輩がギターを持った。

しかし、

「ケーキがないとやる気が出ない」

1秒持たなかった。

まったく、ホントに大丈夫かよこの軽音部。

「唯ちゃん。ケーキよ。はい、あーん」

「ありがとムギちゃん。・・・はむっ」

）

「す、凄い演奏だ！」

「凄い・・・」

そう俺たちが感嘆したのもつかの間で、その5秒後には、

「もうだめえ」

へばった。

集中力無さ過ぎだろ。

そう俺が頭を抱えていると、同じく隣で頭を抱えている梓に平沢先輩がよってきた。

それを確認した瞬間、俺は反射的に平沢先輩から離れていた。我ながら素晴らしい反射神経だ。・・・多分。

そう自画自賛(?)している間に、平沢先輩がケーキを梓に食べさせようとしていた。

「梓ちゃん、あゝん」

「え?でも・・・」

「いいから、いいから」

「う・・・で、でも・・・」

「はい、あゝん」

「・・・・・・はむっ!はうわ・・・・・・」

はい、梓陥落。

いともたやすく落ちたな。

ま、それはそれでいいか。

そう思いながら、俺はお茶用の席からちょっと離れた椅子に座った。

すると、

「はい。結祐くんも、あゝん」

と、琴吹先輩が突如ケーキを持って俺の目の前に出現した。

「……………はい、俺陥落。」

「あれ、結祐くんじゃないの？」

「あ、えっと……………。意識が危険なんでほっとしてもらってもいいですか？」

「あら　目が合っちゃってたかな？ごめんね結祐くん」

そう言って琴吹先輩はおれの前から立ち去った。

「……………あの人が絶対俺で楽しんでやがる。」

今後は琴吹＆平沢両先輩には気をつけようと決意したその時、梓も平沢先輩に遊ばれていた。

具体的にどのようなかと言えば、

「？ケーキ　梓」

梓「ぱああああつ！！」

「？ケーキ　梓」

梓「ズーーーーン……………」

「？ケーキ　梓」

梓「ぱああああつ！！」

「？ケーキ　梓」

梓「ズーーーーン……………」

の繰り返しだった。

ただ、ケーキの位置によって変わる梓の表情を見てこの場にいた全員は同じことを思った。

「「「梓ってわかりやすく、おもしろい」」」

「「「「」」」」

「「せんせーさようなら」」

「はい。さようなら」

私は山中さわ子。

軽音部の顧問です。

さて、いつもならこのまま部室に言ってお茶なんだけど、

「ティーセットは撤去だもんな……。よおーし！ちょっとは教師らしくするぞおー！！」

そう決意して私は部室に向かいました。

なのに……

「「「「」」」」

「みんな、練習やってる？って食べてんじゃん！！」

それが部室にきた山中先生の第一声だった。
ま、でもしょうがないな。

昨日はあんだけ”撤去だー！！”って言ってたしな。

そう俺は思いながら、琴吹先輩がくれた紅茶を一口飲んだ。
それと、ほぼ同時に山中先生が超高速で席につきケーキを食べた。

「・・・私、今死んでもいい」

「おい。戻ってこーい」

「あ、そうそう。そういえば何でティーセット撤去しなかったの？」

「切り替え早っ！！」

そう二回目のハモリを難なくこなした俺と田井中先輩を無視って
山中先生の視線は梓を捉えていた。

さあ、なんて答えるんだ梓？

『ケーキにつられました』か？

「な、なんでもかんでも否定するのはよくないと思って・・・」

そう言った梓を先生以外がジト目で見つめた。

が、当の梓はやり過ぎたと安心してそれに気が付いていない。

・・・つまんねえな。

そう俺が思った時、急に先生が手を叩いた。

「そうそう。私、梓ちゃんにプレゼントがあるのよ！」

そう言って先生は「そこそと何かを探しだした。

そして、出てきたのは、

「せ、先生。それは・・・？」

「ん？ネコ耳よ」

「それは分かりましたけど、これをどうしろと・・・？」

そう梓が言った瞬間、先生がものすごいスピードで梓の後ろに回り、肩をガシッと掴んだ。

数秒遅れて梓はそれに気が付き急いでその手を振り払った。

「な、なにするんですか！？」

「何って、ネコ耳つけるだけよ？」

「そんなの嫌です！先輩たちも嫌ですよね！？」

「ムギちゃん似あう」

「さすがムギだな！」

「ありがとね」

「（つけてるっ！？）」

「さあ、みんなもつけてるじゃない！観念しなさい」

「そんな・・・。結祐！！」

「ゆうくん狼みたいだね」

「ワオーッってやってみるよ、ワオーッって」

「ワオーッ！！」

「わあ、似てる」

「（結祐まで・・・）」

「さ、次は梓の番だ」

「うう・・・。ホントにつけなきゃダメ？」

「ガキの頃はよくつけてたじゃんか」

「それは幼稚園の頃！」

「まあ、いいからつけてみろって」

「うう………」

そう言いながら梓はネコ耳を装着した。

「変じゃない？」

「別に。可愛いと思うぞ俺は」

「んじゃ、ニヤーってやってみるよ！にヤーって」

「にゃ、にゃー………」

「「「（か、可愛い……）」」」

どうやら梓のネコ耳はなかなか強い作用を秘めてるらしいな。
俺以外の見ていた人間が天に召されてしまった。

が、先輩たちはすぐに天から帰ってきた。
そして

「梓ちゃんかわい」

と、平沢先輩が梓に抱きついた。

全くこの人は……。

「今日からあだ名はあずにゃんに決定だね！」

「え………」

「うゝん。可愛い」

そう言いながら、平沢先輩は困惑する梓に頼ずりし始めた。
そして、それを俺を含む軽音部は全員ほほ笑んでみている。

こうして、今日も練習時間が削られていくのだった。

第七話 ？新入部員？？？（後書き）

次回は・・・

『ひ、ひげ！！』

『って言うか慣れたくない・・・』

『俺はそれでも、あのメンバーが好きなんだよ。きっと』

次回【新入部員？】

第八話 ？新入部員？？？（前書き）

新入部員？です！

やっと、シリアス展開若干突入です！

また、結祐の特技が出てくるかも……。

読んだ後は感想をくれるとうれしいです。

また、その際には悪いところも書いてくれるとそれを見てよりよくしていくのでよろしくお願いします。（ただし、作者を誹謗中傷するものはこの作品に関わらず全ての作品でやめてください）

では、どうぞー！！

第八話　？新入部員？？？

またまたまたこれはいつもの登校風景。
ただいつものと違うのは、

「勇利めずらしいよな。朝寝坊なんて」

「そうだね。・・・なんか勇利がいないとちょっと寂しいよね」

「だな。なんだかんだであいつはムードメーカーだったしな」

「・・・そういえば結祐つてどこやるか決めたの？」

「うん。・・・まだ。でもヴォーカルやろうかなって」

「結祐歌うの！？」

「楽器できないし、俺の特技考えたらそれが現実的だろ？」

「まあ、確かにそうだね。っていうか、今日練習するのかな・・・？」

「だ、大丈夫！先輩たちだつてそろそろやるって！」

「ホントに？」

「あ、ああ。俺がなんとかする！だから梓は安心しろ！」

「うん。分かった」

そう言った梓の顔は、何だか納得しきれていない顔だった。

勇利と知り合つて3回目の春。

俺は初めてあの勇利^{アホ}の偉大さを知った。

??????

授業を適当に流し放課後。

今日は純の策略により数回ショートしたが、もう誰にも相手にされなかった。

憂曰く『だんだんみんな慣れてきちゃったんだよ。でもそれって結祐くんのことをみんなが理解できてきたってことだよな』だそ
うだ。

それにしても、放置はひどい気がする・・・。

ちなみに勇利は結局学校を欠席したそうだ。

朝は『寝坊したから先に行っててくれ』としか言っていなかったのに、風邪かな？

そう、一応悪友のことを心配しつつ、俺は部室への階段を息を切らして駆け上がっていた。

一応説明しておく、別に物凄く軽音部に行くのが楽しみなのではない。

まあ、全く楽しみにしていないと言えば嘘になる。

けど、急いでいることには別の理由があった。

まあとにかく部室で先輩たちに会わないと話しにならねえ。

俺はそう思いながら部室のドアを思いっきり開いた。

「こ、こんにちは・・・。ぜえ・・・はあ・・・」

「あ、ゆうくん　って大丈夫!？」

「だ、大丈夫です。それより、先輩たち全員いますか？」

「いるけど、どうしたの？」

「大事な話があるんですよ。この部のことです」

そっついながら、俺はお茶用テーブルの俺の席と思われる場所に

すすんで座った。

先輩たちは、俺が息を切らして入ってきたことにも驚いていたが、すすんで座ったことにはもっと驚いていた。

しかし、俺がいつもよりちよつとピリピリしているのを感じ取ったのか、全員何も言わずに座ってくれた。

「んで、ユウ。大事な話ってなんだよ？」

「時間が無いんで単刀直入に言います。いい加減に練習しないとマズイです」

「そんなこと言ったって。新歓終わったばかりじゃなか」

「確かに先輩たちにとってはひと段落ですけど、新歓を見て入部した梓はやる気満々なんすよ。先輩たちだってわかりますよね？折角やるぞーっ！！」って入部したのに練習できないと思うくらい。第一、まだ梓は楽器にも触って無いんすよ？俺に至っては入部して一週間以上たつのにどこやるかも決まって無いし」

「あ、そういえばゆーくんどこやるか決めて無かったね。あずにゃんはギター持ってたからギターだと思うけど」

「よおーし。それじゃあこれからユウがどこやるかを決め」

「

「てる場合じゃないんすよ！梓は掃除当番だったからまだ来てないけど、もうすぐ来ます。俺のことはあとにして、まずは練習しないとダメっすよー！！」

「えゝでもさあゝ・・・」

と、俺の主張もお構いなしに田井中先輩がダレた。

こっちは真剣にこの部のことについて考えてんのに、いくら先輩でもいい加減に頭にくる・・・。

そう頭の中で俺の怒りが爆発しそうになった時、それを見兼ねた

秋山先輩が俺より先に言い放った。

「いい加減にしろ!!」

その一言で先輩たちの顔色が変わった。

同時に、言いたいことを言ってくれたので俺の怒りも徐々に収まった。

「結祐が言ってることはみんな分かるだろ!? 梓だってもう私たちに呆れてきちゃってるんだ! 今日こそ練習しなきゃ駄目だ!!」

秋山先輩がそう言いきると、若干沈黙が続いた。
そこまで事が進行して俺は始めて気がついた。

先輩たちの築いてきた軽音部なのにこんなこと言って、俺メツチヤ生意気じゃね?

気がついた後は気が気で無かった。
もしかしたら言い過ぎたかも。
俺のせいで先輩たちの仲が悪くなったらどうしょ?

短い沈黙の間にそんな事が頭の中に渦巻いた。

でも大丈夫だった。

俺の生意気な言葉はキチンと届いていた。

「そうだな。漣とユウの言う通りだ」

「私たちのためにも、あずにゃんのためにも頑張んなきゃね!」

「私、今日はティーセットに触らない!!」

「よぉーし!!! 練習だ!!」

「「おーっ!!」」

そう言っって先輩たちは準備しかけていたティーセットを片付け始めた。

その姿を見て俺は物凄くホッとしていた。

いやゝ、今の俺みたいな後輩が入ってきたら俺は絶対嫌いになるな。

そんなことを考えながら自嘲気味に苦笑いしていると、秋山先輩が俺に言った。

「ありがとな結祐」

「へ？」

言っている意味が分からなかった。

それでも秋山先輩は続けた。

「結祐がいなかったらきつと私たちは駄目なままだったから」

「い、いや、そんなこと無かったんじゃないすか？秋山先輩居るし、つつか俺、メチャクチャ生意気だったし・・・」

「確かに新入部員にしては生意気だったな」

「え？やっぱり印象悪かったすか？」

俺のそんなマジの問いかけに秋山先輩は笑いながら、ちょっと上から目線っぽかったしな、と言った。

・・・やっぱ生意気かゝ。

そう俺はちよっと気を落とした。

すると、秋山先輩はそれを見てか、それとも本心なのか、それは秋山先輩を直視できない俺にはわからないが、こう付け加えた。

「でも、私たちには、私たちに気を使わずに一番私たちのためになることを言ってくれる結祐みたいな後輩が必要なんだよ。少なくとも私は今のやり取りでそう思った」

その一言で、俺は目があったわけでもないのに頭がぼーっとなった。

その直後、言葉の意味がきちんと解読されとたんに恥ずかしくなった。

何か言わなきゃとは思ったけど、言葉が出てこなかった。

結果、硬直した。

そんな俺を平沢先輩が呼んだ。

「ゆうくん。澪ちゃん何やってるの？早く練習しようよ！」

「そうだぞ。練習しようって言った二人がこなくてどうすんだよ」

「ごめんごめん。すぐ行く」

秋山先輩はそう言って、自分のベースギターを肩にかけ、定位置についた。

一方俺は、なんだかぼーっとしたまま先輩たちの前の椅子に座った。

「1、2、3、4

」

その田井中先輩の掛け声で演奏が始まった。

だが、音楽は右耳から左耳へ抜けていくばかりだった。

それほどに、進路まで人任せにして適当に生きてきた俺の存在が必要とされたかもしれないという事実は、俺の心を揺さぶっていた。

??????

『ララ また明日』

と、丁度『私の恋はホ チキス』が終わった時、勢いよくドアが開いて梓が飛び込んできた。

そして、楽器を持つ先輩たちを見て一言。

「練習してる・・・!？」

「あたりまえだよあずにゃん! 私たちは軽音部なんだもん! ふんすつ!!」

「昨日までお茶していた唯はいばれないぞ」

「そ、そんなぁ!？ そんな事言うならりっちゃんだって!!」

「私はいばつてないぞ!! と、そんなことは置いといて、梓もいっしょにやろっぜ」

そう田井中先輩に言われ、梓はうれしそうにギターを出した。

「さてと、そういえば確認しなかったけど梓はギターでいいんだよね?」

「はい! 唯先輩と一緒にです!!」

「それじゃあ、リードギターを決めないとな。どっちがやる?」

その田井中先輩の問いかけに、即座に平沢先輩が反応した。

具体的に言うと、目を輝かせて田井中先輩を真っ直ぐ見つめた。その目は”りっちゃん私に！！”と訴えかけていた。

ま、先輩風でも吹かせたいんだろうな。

「・・・じゃ、唯でいいけど、一応梓の実力も見せてくれるか？」
「あ、はい。それじゃあ・・・」

そう言つて梓はギターを肩にかけなおす。
そして、

）　　）　　）

明らかに平沢先輩より演奏をした。

俺は何度か聞いたことがあるのでさほど驚かなかったが、先輩たちは呆氣にとられていた。

やがて、それに気がついた梓が慌てだす。

どうせ「（やっぱり聞き苦しかったかな・・・？）」などと焦ってんだろ。

明らかに梓のほうがうまいのに。

と、内心慌てているであろう梓を見ながら、俺にギターの道は消えたなと確信した時、やっと先輩たち戻ってきた。

「メチャクチャうまいじゃん！！」

「梓ちゃんすごい！」

「・・・唯と同じ、もしかしたらそれ以上かもな」

「これは唯のと聞き比べる必要があるな」

その田井中先輩の一言で全員の視線が平沢先輩に集中する。
さあ、平沢先輩どうする？

「え〜と・・・はうつー！ぎっくり腰があ〜・・・」
「「「見苦しい（っす）」」」

俺と田井中先輩と秋山先輩の的確なツツコミが平沢先輩のハートをブレイクした。

そして、

「あずにゃ〜ん。ギター教えて〜！！」
「「「変わり身はやっ！！」」」

先輩としてのプライドは消え去ったらしい。

??????

平沢先輩が泣きついたこともあり、今は個人練習だった。
言っまでもないが、平沢先輩は梓による個人レッスン中。

また、田井中先輩は走り気味になるのを直すために、琴吹先輩と練習中だった。

こうなってくると、どこをやるかも決まっていない俺は暇人になっ
てしまうのだ。

さて、何をすべきか・・・？

そう俺が思った時、秋山先輩が声を掛けてきた。

その瞬間に俺は目を逸らした。

「そういえば、結祐はどこやりたいんだ？」

「唐突っすね。まあ、どこでもいいですけど、ギターは勘弁っすね。梓にや敵いつこないし」

「ははっ。確かにそうだな。じゃあ、ベースやってみる？」

「うん。確かにベースもいいっすね。でもドラムやキーボードも捨てがたいし……」

「そういえば、結祐って音楽経験あるんだっけ？」

「無いっす。だから、どこをやるにしても時間はかかるんすよ」

「そっか。じゃあ、急がないでゆっくりやりたいところを探すといいよ」

「そうつすね」

そう言って、俺は自分がベースやらドラムやらキーボードやらをやってる所を想像した。

……似あわない、気がする。

そう苦笑いした時、ふと朝自分が言ったことを思い出した。

「あ、そういや、俺やりたいところありました。っつか正確にはやれること」

「え？結祐、何か出来るのか？」

「はい。俺、ヴォーカルやろうと思ったんすよ」

「ヴォーカルって、歌うのか？」

「はい。俺、歌うの得意っつか、喉だけが自慢なんで」

「喉？」

「はい。まあ、言うより見せたほうがはやいっすね」

俺がそう言うと、秋山先輩は軽く首をかしげた。

ま、なに歌うのかとか、そんなこと考えてるんだろ。

と、俺は頭の片隅で予想しつつ、いつもの様に声を出し始める。

「あー、あー、あー・・・」

その声は徐々に高音になっていき、

「あーいーうー・・・まあこんな感じか」

そして、俺は言い放った。

『こんにちわ。平沢唯です』

「「「「「・・・は？」」「」「」

自主練だったのに先輩たちの声が見事にハモった。

とはいえこのリアクションは想定内。

だって、男の俺が”完璧に”平沢先輩の声を再現したんだから。

『これが私の特技です』

「ゆ、唯。今喋ったか？」

「ううん。私何も言っていないよ」

「じゃ、じゃあ濤。今の声は結祐から確かに出てたか？」

「うん。信じられないけど。はつきり結祐から唯の声が・・・」

『すごいでしょう』

「「「「「えーーーーっ!？」」「」「」

またまた先輩たちのリアクションがかぶった。
打ち合わせしてるんだろうか？

そんな事を考えつつ俺は声を元に戻した。
声を合わせるのは大変だが、戻すのは簡単なのだ。

「あー。直ったな。つーわけで俺の特技は『声マネ』です。まあ、別に誰かの声を再現しなくても高音や低音出るんすけどね」

「ゆ、ゆーくんスゴイ……」

「ほんとね……」

「結祐……すごいな……」

「な、なあユウ。それって誰でも可能なのか？例えばムギとか」

そう田井中先輩からリクエストがあつたので、俺は軽く発声し音を合わせる。

……よし。こんなもんか。

『みんな〜。お茶にしよう』

「ムギだー!!」

「ムギちゃんそっくりだ!!」

「わぁ 私にそっくり……」

「ホントに凄いな。どうしてそんなことができるようになったんだ？」

秋山先輩がそう聞いてきたので、俺は何となく秋山VOICEで返してみた。

『お母さんがオペラ好きで、その真似をしていたらいつの間にか大抵の声は再現できるようになったんだ』

「おお！凄いの声ー!!」

「なんだか恥ずかしいな……。でも、凄いな。真似してただけで自然にできたなんて」

『そうかな?』

「なあなあユウ。何でもいいけど、その声で『萌え萌えキュン?』って言ってくれ!」

「それ私も聞きたい!」

……言えるか。

そう思ったが、田井中先輩と琴吹先輩の目が期待している。……気がする（実際には見て無いから）。

まあ、どうせ秋山先輩の声だし、いいか。そう思って、

『萌えも

』

と言おうとした瞬間、

「やめてええええ!!!」

という声とともに、俺は秋山先輩に取り押さえられた。そして、当然の如く。

しゅうううう~~~~~

ショートした。

??????

「ふう〜。今日はしっかり練習したな〜」

「そうだね、りっちゃん！いつもの十倍は練習したね！」
「はあ。指がもうくたくた」

そんなことを言いながら先輩たちは楽器を片付け始めていた。

まあ、西日も大分差し込んできたし、練習終わるには良い頃合い
だろ。

・・・後半あんま練習してなかった気がするけど。

そう思いながら、俺も適当に荷物をまとめていると、

「すみません。ちょっと、用事があるんで早く帰ります」

「ん？そっか。んじゃ、また明日な梓」

「じゃあね、あずにゃん」

「また明日」

「じゃあな梓」

「はい。それでは」

と言って、梓が部室から出て行ってしまった。

あいつどうせ用事なんか無いんだろうな。

そう思った俺は梓を追いかけることにした。

直感でそうするべきと思った。

「すみません。俺も帰ります」

「そっか。んじゃなユウ」

「ゆーくん、ばいばい」

「またな結祐」

「また明日ね」

「はい。んじゃ」

そう言っつて、俺は部室を後にした。

そして、先に帰路についている梓を追いかけた。

??????

「おい！梓！」

そう声を掛けられたのは学校から出てわりとすぐだった。

・・・結祐にはどうせ嘘ついたのばれてるんだろぅな。

「はあ、はあ・・・。たく置いてくなよ。せめて俺を待ってくれた
つていいだろ？梓が帰りたかったのも分かるけどさ」

「やっぱり気がついてた？」

「まあな。だてに幼馴染やってねえし。それより、あの部には慣れたか？」

「うゝん。微妙かな」

「まあ、そのうち慣れると思うぞ。俺みたいに」

「そうかな・・・？（っていうか、慣れたくない）」

そんな事をついつい声に漏らしそうになった時、結祐から思いも
よらない話を振ってきた。

「なあ、梓。好きな人いる？」

「ぶっ！！なんで急にそんなこと！？」

「別に大した意味はねーよ。ただ幼馴染として梓の恋模様は把握し
ておく義務が」

「無いっ！！」

「ははっ。軽い冗談だっ」

全然重たいよ……。

私はそう思いながら、今日を振り返った。

今日は練習して、笑って、笑って、笑って……結局あんまり練習してない気がする。

「ねえ、結祐」

「なに？」

「結祐は何で軽音部を続けてるの？やる気の無い部なのに……」

そう言ってから、はっと我に返った。

私とんでもないこと言ってる！

そう思いながら恐る恐る私は結祐を見た。

すると、結祐はもとも私がそう思っていたのも、そんな事を聞かれることも見通していたかのように軽く微笑んで答えた。

「俺は、あのメンバーが好きだから」

「え？」

「やる気はねえし、お茶ばっか飲んでっけど、俺は引き込まれる演奏をするあのメンバーが好きなんだよ。理由はそんだけ」

「でも、ちゃんと練習しないんだよ？それなのに……」

「まあ、それはよくねえとこだけど、俺はそれでもあのメンバーが好きなんだよ。きつと」

私には理解できなかった。

結祐には誰にも負けないような声がある。

きつと外バンでも通用する。

なのに、たったそれだけの理由で軽音部にいる意味が私には分からなかった。

「梓には、ちよつと分かんなかったかもな」

そう言つて結祐はニヤツと笑つた。

結祐には何でもお見通しだつた。

「まあ、あんま考え過ぎんなよ。俺でよけりゃあ何でも相談に乗るからよ！ んじゃあな」

そう言つて、結祐は右に曲がつた。

その背中を私は見つめながら、思った。

結祐には私の事が見えるのに、何で私には見えないんだろう？
結祐には、あの部がどう見えてるんだろう？と。

第八話 ？ 新入部員？？？（後書き）

次回は・・・

『このままじゃ、来なくなっちゃうかもしれないぞ！！』

『（なんでこんなやる気の無い部にいるんだろ？）』

『それは先輩たちにしかできない。だから俺は

』

次回【新入部員？？】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7609z/>

K-ON <Backroom Story>

2012年1月5日23時47分発行